

京都府埋蔵文化財情報

第111号

長岡京市調子2丁目出土の銅鐸形土製品について-----	肥後弘幸 ---	1
平成21年度発掘調査略報-----		9
9. 中山城跡	10. 大谷口遺跡第5次	
11. 蔵垣内遺跡第13次・国分古墳群	12. 平安京跡	
13. 長岡京跡右京第968次	14. 長岡京跡右京第969次	
15. 長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡	16. 長岡京跡右京第988次・伊賀寺遺跡	
17. 長岡京跡右京第986次・上里遺跡	18. 鈴谷窯第1次・西代遺跡第2次	
19. 新田遺跡第7次	20. 国宝慈照寺銀閣	
遺跡でたどる京都の歴史8 近世の京都-----		29
長岡京跡調査だより・107-----		38
普及啓発事業-----		40
センターの動向-----		41

2010年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 長岡京市調子2丁目出土の銅鐸形土製品

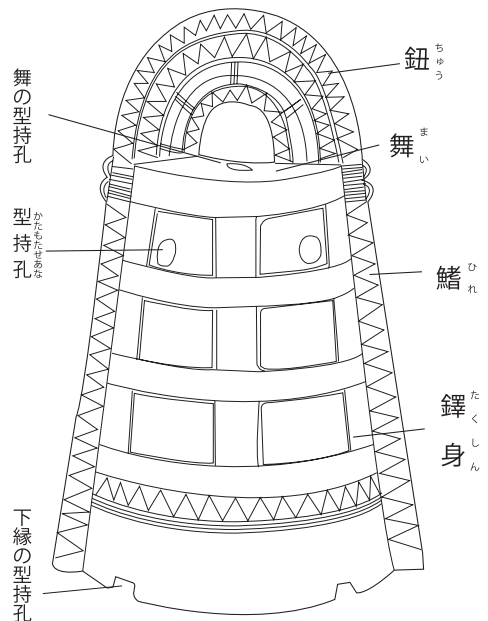


長岡京市調子2丁目出土の 銅鐸形土製品について

肥後弘幸

1. はじめに

銅鐸は、武器形青銅器と共に弥生時代を代表する道具である。その起源は武器形青銅器とともに大陸に求められ、半島部の朝鮮式銅鐸や漢式馬鈴と深い関係があると推定されている。遅くとも中期初頭までに国内で生産の始まった銅鐸は、近畿地方を中心に独自の発展をし、祭りの鐘としての「聞く銅鐸」から、装飾が複雑化するとともに大型化した「見る銅鐸」へと発展する。銅鐸内面に磨り減った突帯があること、舌と呼ぶ棒状製品が共伴する例があることから、内部に吊るした舌が銅鐸に振動を与えることにより内面突帯あたり、独特の金属音を鳴らしたことがわかる。農耕祭祀において主たる道具として利用されたと推定されている。



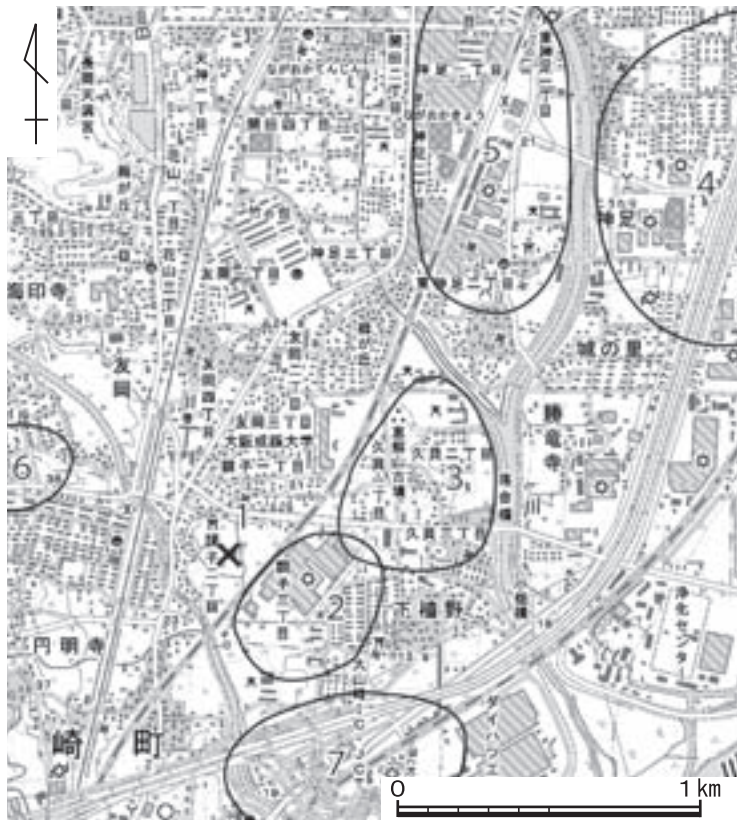
第1図 銅鐸の各部の名称
6区画袈裟櫛文の木津銅鐸のスケッチ

この銅鐸を模倣したものに、青銅製品と石製品及び土製品がある。本稿では、土製品の新資料を報告するとともに、近畿地方の銅鐸形土製品の概観を述べることにする。

2. 長岡京市調子2丁目出土の銅鐸形土製品

当調査研究センターが平成20年度に長岡京市調子2丁目で実施した長岡京跡右京第946次調査において、弥生時代中期の土坑を幾つか検出している。その内のひとつS K181から、多くの弥生土器片とともに銅鐸形土製品が出土した。その後、洗浄作業中に鐸身内部から舌形土製品が発見された。全国ではじめての銅鐸形土製品と舌形土製品との確実な共伴例であること、遺存状況が良いことから、平成21年8月に開催した第25回小さな展覧会で公開展示した。なお、本格的な整理作業は、未着手で、報告書は平成22年度以降に刊行する予定である。遺構の時期については、同一土坑内から弥生時代第Ⅱ様式と第Ⅲ様式の土器が出土しており、弥生時代中期中葉としておく。遺構の性格・詳細な時期等については今後の整理作業の進展を待ちたい。

出土地点は、小泉川の氾濫原である扇状地上に立地する。その50m東方には中期後半の集落遺跡である^{はごま}裕遺跡が存在し、当該地点も裕遺跡との関連性が高いと考えられる。また、裕遺跡の南

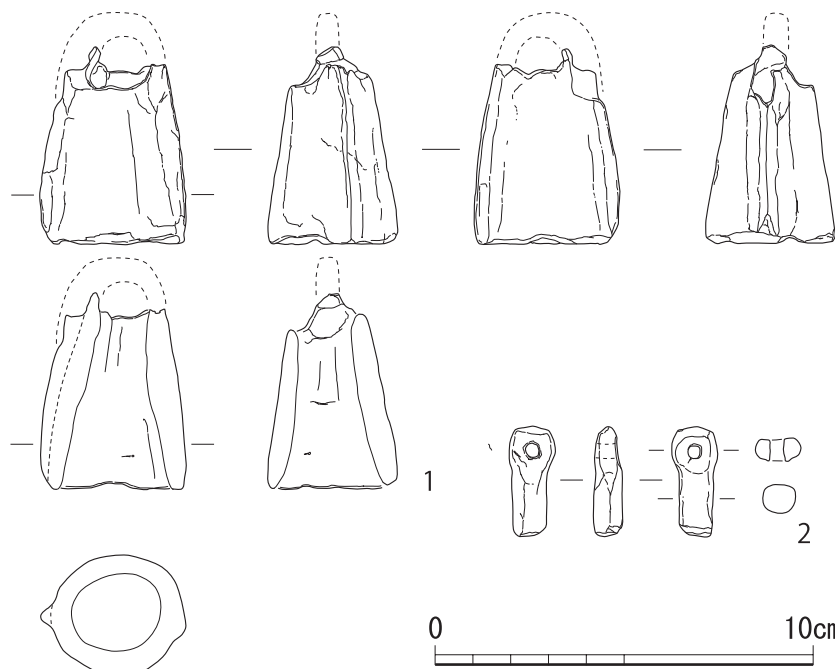


第2図 出土地と周辺の遺跡 (国土地理院 京都西南部 1/25,000)

1. 出土地点 2. 裕遺跡 3. 南栗ヶ塚遺跡 4. 雲宮遺跡
5. 神足遺跡 6. 脇山遺跡 7. 下植野南遺跡

方には中期中葉の方形周溝墓82基が検出された下植野南遺跡が、北東1.5kmの地点には乙訓地域最大の拠点集落神足遺跡が所在する。このほか、近辺には前期の環濠集落雲宮遺跡や南栗ヶ塚遺跡、中期前葉の脇山遺跡もあり、出土地は弥生時代の集落遺跡の密集地域の一面にあたる。

銅鐸形土製品(第3図1)は、粘土板を巻いて作られた筒状の土製品である。鈕と舞部を欠いている。鱗は片側をつまみだして成形し、片側は粘土紐を足して成形している。舞部は粘土をつまみだして成形されていたと考えられるが、よくわからない。鈕部は全損しているが接合痕が



第3図 銅鐸形土製品及び舌形土製品実測図

明瞭に残る。残存高5.2cm、底部長径4.0cm、短径3.3cmを測る。型持^{かたもち}孔は表現されておらず、^{あな}無文である。簡素な作りながら、丁寧な作品であり、土器制作者の手によるものと考えられる。

舌形土製品(第3図2)は、やや扁平な棒状の粘土の上端を平たくし、その中央に孔をあけている。全長2.9cm、

上端部直径1.2cmを測る。2点とも乙訓地域によく見られる胎土からなる。

銅鐸形土製品(弥生時代に限定)は全国で180例以上確認できるのに対して、舌形土製品の出土は5例である。^(注1)鐸形と舌形の共伴が確実な例は本例が唯一である。舌形土製品の出土は、小さい

ため発見されにくいことと、舌形土製品と気付かずに未報告の場合があることを考慮に入れても極めて少ないと言える。500点以上の出土例のある銅鐸は、舌と一緒に埋納される例が少なく、舌(青銅製と石製)の出土例は37例しか知られていない。銅鐸の場合木製や鹿骨製の舌の存在が想定されており、土製品の場合も残りにくい木製品の存在が予想される。

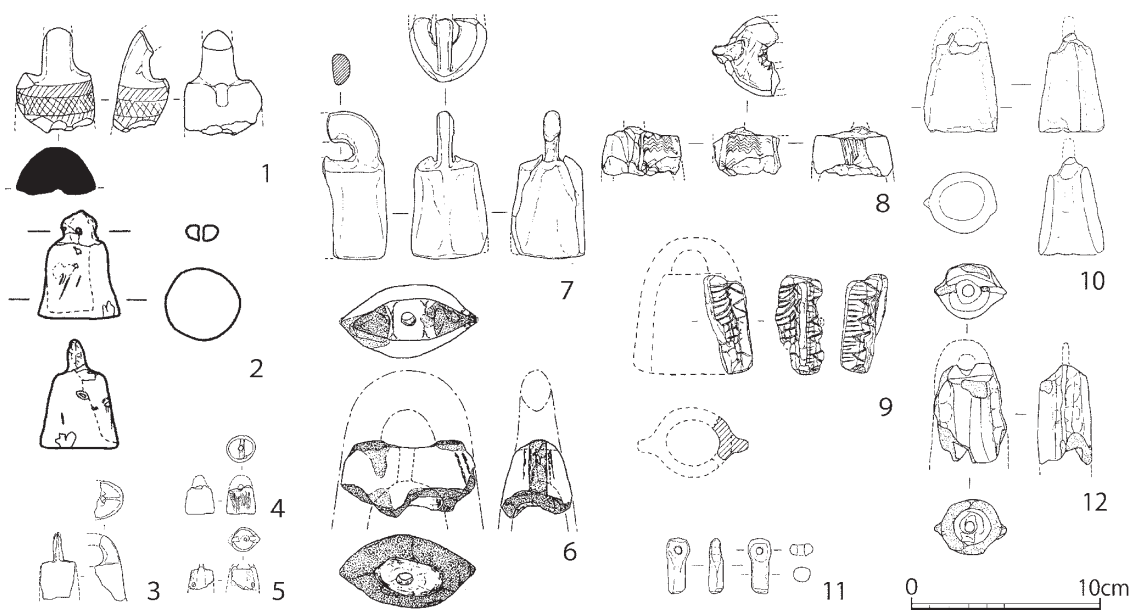
3. 京都府内出土の銅鐸形土製品 (第4図)

京都府内からの銅鐸形土製品の出土例は本例を含め11例ある。京丹後市奈具谷遺跡1例(1)、同古殿遺跡1例(2)、与謝野町日吉ヶ丘遺跡4例(3～6)、福知山市観音寺遺跡2例(7・8)、長岡京市神足遺跡1例(9)、木津川市木津城山遺跡1例(12)が知られる。古殿例と木津城山例を除くといずれも中期中葉から後葉にかけての地域の中心となる拠点集落から出土している。

奈具谷例(1)は横帯文銅鐸を表現したもので中期中葉から後葉にかけての溝内から出土した。長岡京市神足例(9)には鱗から鐸身部にかけて鋸歯文の表現が見られる。中期前半の溝から出土した。この2例以外は無文である。4点が出土した日吉ヶ丘遺跡の1km北方には須代銅鐸出土地が、北西3kmには高さ103cmを測る梅林寺銅鐸の出土地がある。後期前葉の木津城山遺跡の西南西3kmに木津(相楽)銅鐸出土地がある。中期後葉の観音寺遺跡では、7が土壙墓から、8がせみ形土製品とともに住居跡内から出土している。後期後葉の古殿例は、他と違って中実であり異論があろうが、模造品として銅鐸以外に該当品がなく、銅鐸形土製品として扱った。

4. 近畿出土の銅鐸形土製品 (第5・6図)

近畿地方からは、京都府の11例を加えて79例の銅鐸形土製品と計2例の舌形土製品が出土して



第4図 京都府内出土の銅鐸形土製品及び舌形土製品

- | | | | |
|----------|-------------|-------------|------------|
| 1. 奈具谷遺跡 | 2. 古殿遺跡 | 3～6. 日吉ヶ丘遺跡 | 7・8. 観音寺遺跡 |
| 9. 神足遺跡 | 10・11. 調子遺跡 | 12. 木津城山遺跡 | |

いる。大阪府23例、兵庫県4例、奈良県29例、和歌山県5例、三重県7例である。第5・6図に実測図の入手できたもののうち、形状をよくとどめるもののみ図示した。

大阪府での出土例は、茨木市東奈良遺跡4例、同倍^か賀遺跡1例(13)、寝屋川市高宮八丁遺跡1例、東大阪市鬼虎川遺跡3例(15・16ほか)、同瓜生堂遺跡1例(17)、大阪市平野区长原遺跡2例(18・19)、堺市南区野々井遺跡1例(26)、八尾市亀井遺跡8例(20～23ほか)及び和泉市・泉大津市池上曾根遺跡2例(24・25)である。このうち、住居跡内から出土した野々井遺跡例が確実に後期初頭まで下がる例で、他は中期に属する。倍賀遺跡と野々井遺跡以外は中期の拠点的な集落遺跡である。鬼虎川遺跡、東奈良遺跡は銅鐸鑄型が出土した青銅器生産遺跡でもある。発掘調査が数次にわたり実施された亀井遺跡・池上曾根遺跡では、集落内から銅鐸片が出土している。

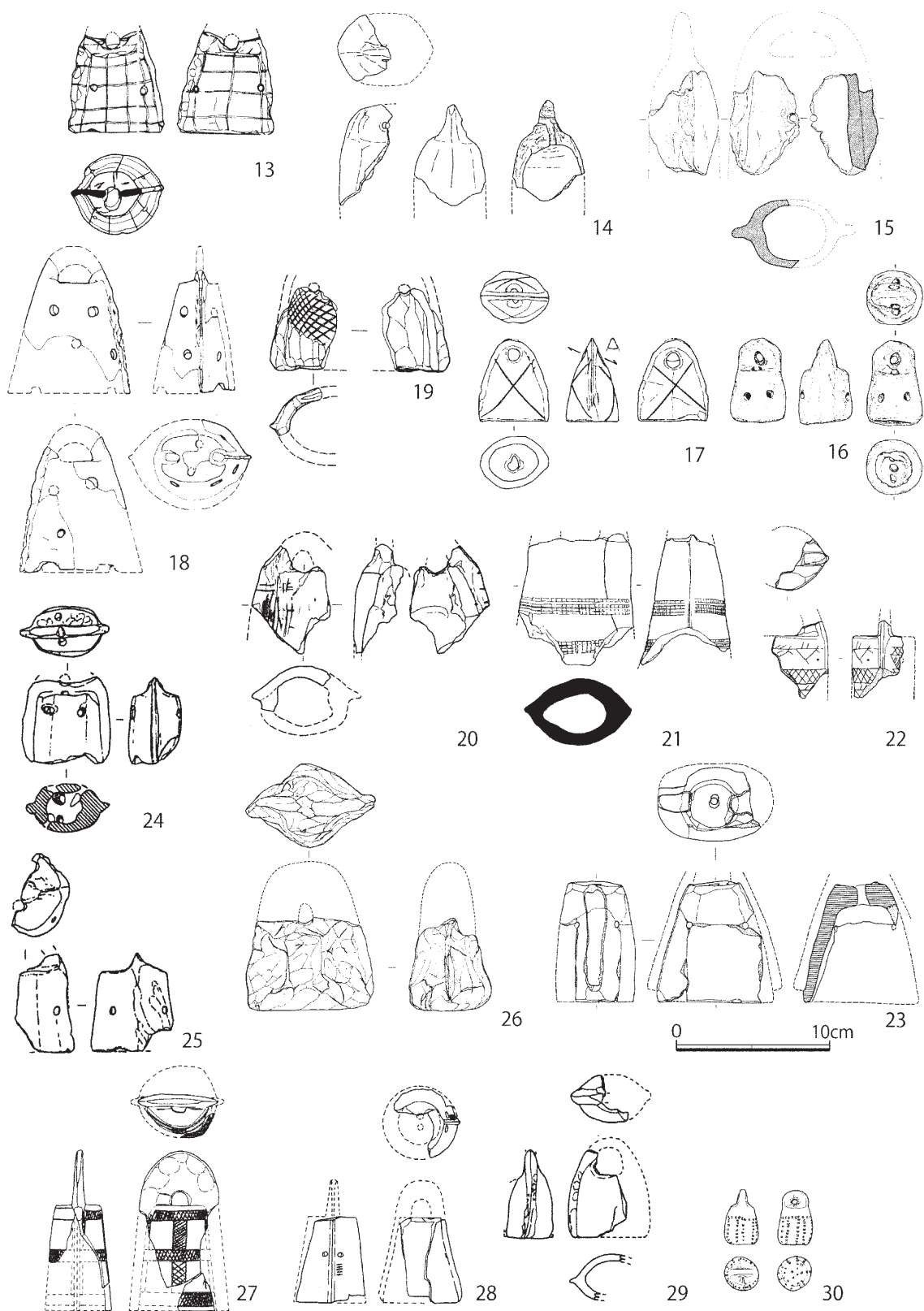
銅鐸形土製品の多くが銅鐸を簡略化して模倣したものが多く、下縁の型持孔まで忠実に模した長原例(18)、小破片で詳細はわからないが鋸歯文と斜格子文を描き分けて魚を描いている亀井例(22)などは注目される。倍賀例は袈裟襷文を表現しているが区画の表現が銅鐸とはかけ離れている。完形品で出土した瓜生堂例は、よく見ると鱗部の表現、舞孔の表現、鈕の表現など比較的忠実に模倣していることがわかる。鐸身部両面に記された×の記号文は、銅鐸の鈕や銅劍の茎にもしばしば見られる文様である。唯一後期に属する野々井例は、突線鈕式銅鐸を模したものであるが中実で手捏ねによる簡易な模倣品である。

兵庫県での出土例には、芦屋市三条九ノ坪遺跡1例、宍粟市田井遺跡1例、赤穂市有年原・田中遺跡2例がある。三条九ノ坪遺跡例は鈕のみの部分である。田井例はほぼ完形で、全高10.7cmを測り、鐸身部を縦方向の綾杉文で飾った優品である。宍粟市では3か所から銅鐸が出土している。有年原・田中遺跡では2点ともに河川内から分銅形土製品とともに出土している。

和歌山県での出土例には、海南市亀川遺跡1例(30)、同岡村遺跡2例(27・28)、かつらぎ町西飯降Ⅱ遺跡1例及び橋本市血縄遺跡1例(29)がある。唯一後期に属する亀川例は、小型品で中実であるが、刺突文による表現は鐸身の区画をイメージしたものと考えられる。岡村遺跡の2例は同じ中期後葉の同一溝内から出土したもので、相伴遺物に鳥形土製品2点(内1点は鶏)がある。27は4区画の袈裟襷文銅鐸を模したもので、精巧に模しているように見えるが、鱗部や鈕部に鋸歯文が見られない。4区画袈裟襷文銅鐸は、和歌山県内から多数出土している。紀ノ川中流域の拠点集落である血縄遺跡例は瓜生堂例と共通した形状を持つ。このほか、近年調査された西飯降Ⅱ遺跡は、多数の竪穴住居跡が見つかった中期後葉の拠点集落である。

奈良県での出土例には、天理市平等坊岩室遺跡1例、同布留遺跡1例、同清水風遺跡3例(31～33)、田原本町唐古鍵遺跡14例(34～40ほか)、橿原市四分遺跡2例(46ほか)、桜井市大福遺跡2例(41・42)、同芝遺跡5例(43～45ほか)、御所市鴨都波遺跡1例(47)がある。古くから知られる板状の粘土塊に孔を空け鏢状の装飾を持つ布留例は、弥生時代後期～庄内期の包含層から出土している。それ以外は多くは中期に属するが、唐古・鍵例の中に後期・庄内期のものが数例あり、四分例(46)も後期に属する。

清水風遺跡の3例は、50点を超える絵画土器を含む中期後葉の弥生土器とともに溝内から出土



第5図 近畿地方出土の銅鐸形土製品1 (大阪府、和歌山県)

- | | | | | |
|-------------|---------------|--------------|-------------|-------------|
| 13. 倍賀遺跡 | 14. 高宮八丁遺跡 | 15・16. 鬼虎川遺跡 | 17. 瓜生堂遺跡 | 18・19. 長原遺跡 |
| 20～23. 亀井遺跡 | 24・25. 池上曾根遺跡 | 26. 野々井遺跡 | 27・28. 岡村遺跡 | |
| 29. 血縄遺跡 | 30. 亀川遺跡 | | | |



第6図 近畿地方出土の銅鐸形土製品2 (奈良県、三重県)

31～33. 清水風遺跡

34～40. 唐古鍵遺跡

41・42. 大福遺跡

43～45. 芝遺跡

46. 四分遺跡

47. 鴨都波遺跡

48. 上箕田遺跡

49. 涌早崎遺跡

50. 太田遺跡

51. 北野遺跡

した。31は、外縁鈕式袈裟襷文銅鐸を模したもので、斜格子文、斜線文、鋸歯文が描かれている。清水風遺跡は唐古・鍵遺跡の分村と考えられている。多重環濠をもち直径400mの大集落である唐古・鍵遺跡では、銅鐸鑄型をはじめ多くの青銅器鑄造関連遺物が出土している。銅鐸形土製品の出土点数は全国で最も多く、本稿では14例として扱ったが、2008年3月刊行の報告書では16点出土していると報告された。35～38は鐸身部に文様を描くもので、4区袈裟襷文銅鐸を模した36には、魚や鹿の絵画があり鱗部には鋸歯文が描かれている。40には鐸身部に斜格子を充填した横帯文の表現と人物絵画が描かれている。34は鐸身部に多数の円形刺突を行っており亀川例に共通する。大福遺跡は中期～後期の拠点集落である。後期には遺跡の東端で銅鐸を鑄造していたようで、鑄型や送風管などに混じって原料として再利用する目的で持ち込まれた銅鐸片が出土している。また、方形周溝墓の溝内から埋納された袈裟襷文銅鐸が検出されている。41は2本の沈線で文様を描いたもので、型持孔も表現されている。42の舌形土製品は、橿原市側(坪井遺跡)から出土したもので、全長4.4cm・下端部直径1.2cmを測り、上端部に直径0.2cmの孔がある。纏向遺跡の南の芝遺跡も中期の拠点集落である。凶化した3点はいずれも舞部の型持孔が表現されている。46の四分遺跡例は、鈕を大きく表現したもので、突線鈕式銅鐸を模した可能性がある。

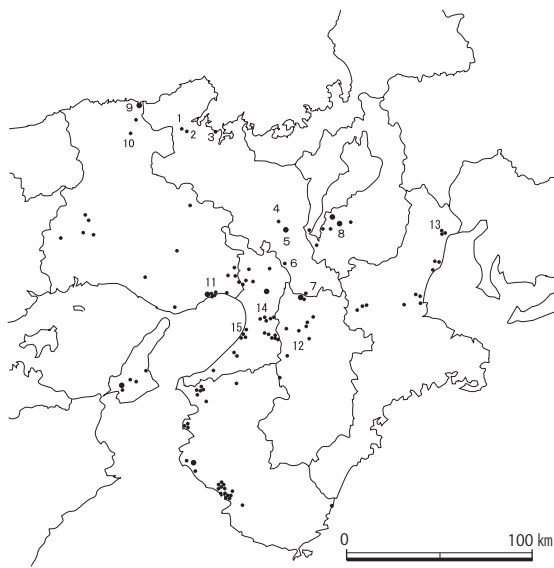
三重県出土例には、津市大田遺跡1例(50)、松阪市堀町遺跡1例、同涌早崎遺跡1例、鈴鹿市上箕田例(48)及び明和町北野遺跡2例(51ほか)がある。中期末の涌早崎例以外はいずれも後期の遺構から出土している。49・50は鱗部に特徴的な突起が見られ、突線鈕式銅鐸の発達した飾耳を表現したものと考えられる。

5. おわりに (銅鐸祭祀と銅鐸形土製品)

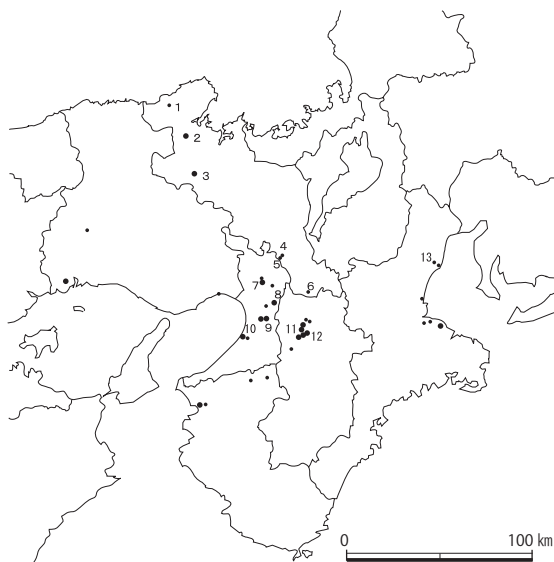
ここまで見てきたように銅鐸形土製品は、銅鐸を模したものではあるが、銅鐸の文様構成、正確な形を理解できずに表現されている。多くが弥生時代中期に制作されたものであり、その中には人物・魚まで描く精巧なものも含まれるが、後期にはより表現が誇張・強調(デフォルメ)される傾向にある。銅鐸形土製品の制作者は、ムラの長や司祭者が行う祭りに用いられた銅鐸に憧れ、土製品を制作したものと思われるが、聞く銅鐸から見る銅鐸に変化する中、大型化して本来良く見えるはずのものが、土製品制作者には詳細には見えていないのである。見る銅鐸は聞く銅鐸に比べて人の目に直接触れる機会が減少していたのではなかろうか。

全国的に見ると銅鐸形土製品は、北は富山県、東は群馬県、南は熊本県まで広く分布するが、その分布の中心は、佐賀県を中心とする地域(北部九州グループ)、近畿地方を中心とする地域(近畿グループ)、三重県・愛知県の地域(東海グループ)と大きく3つである。佐賀県を中心とするグループは朝鮮式小銅鐸を模した可能性があり、後期のものが多い東海グループは見る銅鐸を模倣した可能性がある。地域によって模した銅鐸が違っているようだ。

近畿地方に限れば、滋賀県を除くと第7図に示したように銅鐸の出土地と銅鐸形土製品の出土地がおおむね重なることがわかる。出土場所は集落内の各所で特定されないが、他の祭祀遺物との共伴例があり、破片で出土することが多い。銅鐸祭祀の行われたムラでは、銅鐸形土製品によ



●は銅鐸出土地点 ●は3個以上まとめて出土した地点



●は銅鐸形土製品出土地 ●は2点以上まとめて出土した遺跡

第7図 近畿地方における銅鐸出土地（上）と銅鐸形土製品の出土地（下）

1. 梅林寺銅鐸
2. 須代銅鐸
3. 由良銅鐸
(匂ヶ崎銅鐸)
4. 弓削銅鐸
5. 梅ヶ畑銅鐸
6. 男山指月銅鐸
7. 木津銅鐸
(相楽銅鐸)
8. 大岩山銅鐸
9. 気比銅鐸
10. 久田谷銅鐸
11. 桜ヶ丘銅鐸
12. 大福遺跡
13. 一反通遺跡
14. 亀井遺跡
15. 池上曾根遺跡

1. 奈良谷遺跡
2. 日吉ヶ丘遺跡
3. 観音寺遺跡
4. 神足遺跡
5. 砦遺跡 (調子)
6. 木津城山遺跡
7. 東奈良遺跡
8. 鬼虎川遺跡
9. 亀井遺跡
10. 池上曾根遺跡
11. 唐古鍵遺跡
12. 大福遺跡
13. 一反通遺跡

る祭祀が別の実施者により別の場所で行われていたのではある。

今回の出土例により、銅鐸形土製品による祭祀も銅鐸同様舌を伴ったものである可能性が高くなった。省略してもよいはずの舞部などの型持孔の表現がしばしば見られるのは不思議な思いであったが、今回の出土例により、本来、舞部の型持孔は、舌を吊るす装置でもあったのではないかと考えられる。

また、乙訓周辺は銅鐸の出土は知られていないが、銅鐸形土製品の出土が神足遺跡と合わせて2例となったことに、向日市鶏冠井遺跡での中期前葉の銅鐸鑄型の出土、長岡京市長法寺遺跡での青銅器土製鑄型外枠の出土などを考え合わせると、乙訓地域でも銅鐸祭祀が盛んに行われていたことは明らかであろう。

(ひご・ひろゆき = 当調査研究センター調査第1課長兼調査第2課長)

注1 銅鐸形土製品については、多くの方々から御教示いただいた。記して感謝したい。近畿弥生の会のホームページ上にその集を掲示していただいているので参考にさせていただけると幸いである。

注2 銅鐸の出土地等については、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターホームページ掲載の銅鐸出土地名表を参考にした。

参考文献

佐原真『歴史発掘8 祭りのカネ銅鐸』講談社 1996
 大野勝美「銅鐸形土製品考—銅鐸祭祀の東限を考える—」『(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』2004
 角南聡一郎『『祭祀土製品』小考—亀井遺跡出土の分銅形土製品・新例—』(『大阪文化財研究第5号』(財)大阪文化財センター) 1993

なかやまじょう
9. 中山城跡

所在地 舞鶴市中山ほか

調査期間 平成21年11月17日～12月22日

調査面積 320㎡

はじめに 今回の発掘調査は、府道西神崎上東線の拡幅に伴い京都府中丹東土木事務所の依頼を受けて実施した。中山城跡は、由良川東岸に面した細長い丘陵上に築かれた戦国時代の山城である。過去4回の発掘調査では、安土・桃山時代から江戸時代にかけての火葬墓や土壙墓が9基確認されている。また、土塁や空堀も確認されている。

調査概要 中山城跡は南北600m、東西100mの丘陵高所（標高約60m）の範囲に5か所の郭を設け、その西側の1段下がった箇所にも腰曲輪（郭）を配置した、中規模程度の山城である。もっとも北に主郭があり、今回の調査地は北から3番目に位置する、標高60mの郭（平坦地）の西部にあたる。調査トレンチは、丘陵平坦面の高所から西側へ3段の階段状に成形された平坦地と斜面に8か所のトレンチを設けた。

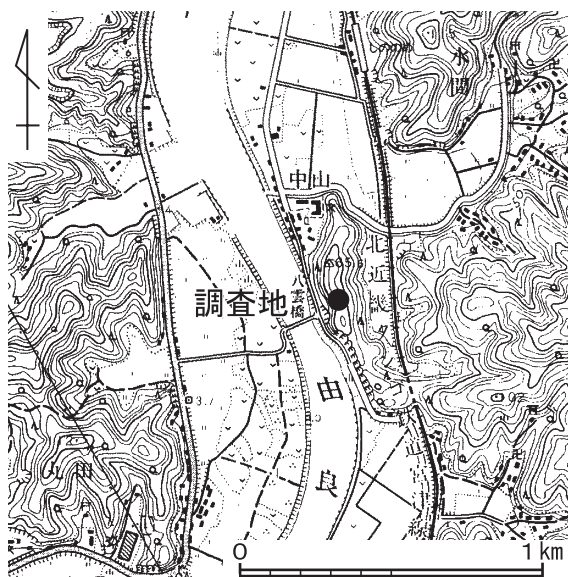
調査の結果、斜面は45度の急斜面であるが、すべての箇所、人工的に地山を削り改変しており（切岸）、防御を固めていたことが判明した。最高所から6mほど下がったところに、腰郭がある。2段目の平坦地で、幅4～5mの南北に長いものである。この平坦な面は、緩やかに傾斜する自然地形の高いところを削り、低いところに盛土して造成していたことが判明した。

標高45mの3段目の平坦地には、現在中山（城山）八幡神社がある。この南部でも、自然地形を改変して、平坦地を造成していたことが判明した。

今回の発掘調査で出土したのは、戦国時代の土師器皿や中国製青花磁器などである。このことから中山城跡が戦国時代の山城であることが、確認された。

まとめ 調査の結果、戦国時代の陶磁器が出土したことや、斜面を45度に削り、防御施設（切岸）を構築していたことから、全体が山城であることが確認できた。

（伊野近富）



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 西舞鶴)

おおたにぐち
10.大谷口遺跡第5次

所在地 南丹市八木町諸畑大谷口

調査期間 平成21年5月23日～10月7日

調査面積 2,000㎡

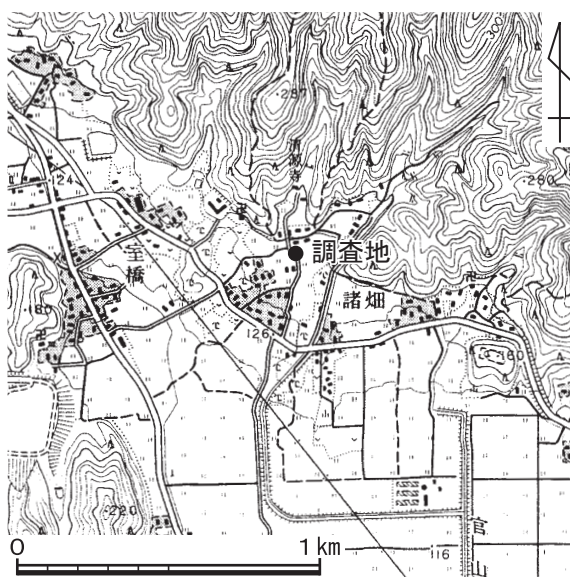
はじめに 大谷口遺跡は、縄文時代から中世に至る複合集落遺跡である。平成16年度に旧八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)が大谷口古墳群として範囲確認調査を行った結果、遺構や遺物が確認され、新たに周知された遺跡である。南丹市諸畑・室橋・野条・池上地区では、平成13年度から府農林水産部により、府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」のほ場整備事業が進められており、今回の調査は同事業の一環で実施した。

大谷口遺跡では、過去4次にわたる調査が実施されている。第1次調査は、縄文時代後期の遺構や中世遺構が検出され、第2次調査では、古墳時代前期～中期の竪穴式住居跡や溝のほか、平安～鎌倉時代の溝や土坑、柱穴等が確認された。また第3・4次調査では、古墳時代の溝や奈良～平安時代後期の柱穴等が検出されている。

調査内容 今回の調査は、遺跡北半部を中心に7か所の調査区を設定して実施した。検出遺構は、縄文～室町時代までの各時代にわたる。以下、主な遺構について述べる。

縄文時代の遺構は、遺跡北西部の7区で、円形土坑1基を検出した。出土した土器はわずかであるが、縄文時代後期～晩期の遺構と推定される。縄文時代の遺構は、7区の東側で調査された第1次調査でも後期の遺構と遺物が出土し、遺跡北西部を中心に広がると推定される。

弥生時代の遺構は、各調査区で検出し、遺跡範囲全体に広がることが判明した。具体的には、



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 殿田)

前期末～中期初頭とみられる土坑1基、中期後半の土坑群や土器棺墓とみられる土坑、後期前葉の竪穴式住居跡1基、後期中葉の竪穴式住居跡1基、後期後葉と推定される土坑1基と柱列などがあげられる。このうち2区では、水場周辺に形成されたとみられる中期後半の複数の土坑から壺や甕などの土器や磨製石斧が出土した。また3区では、中期後葉の土器棺墓とみられる土坑や後期中葉の円形竪穴式住居跡が検出され、4区でも後期後葉の土器溜まり状の土坑から多くの土器が出土した。弥生時代の遺構は、遺跡西部にも広がっており、6区では鉢2点を埋納する後期後葉の小土坑を検出し、7区では

後期前葉の円形竪穴式住居跡を検出した。

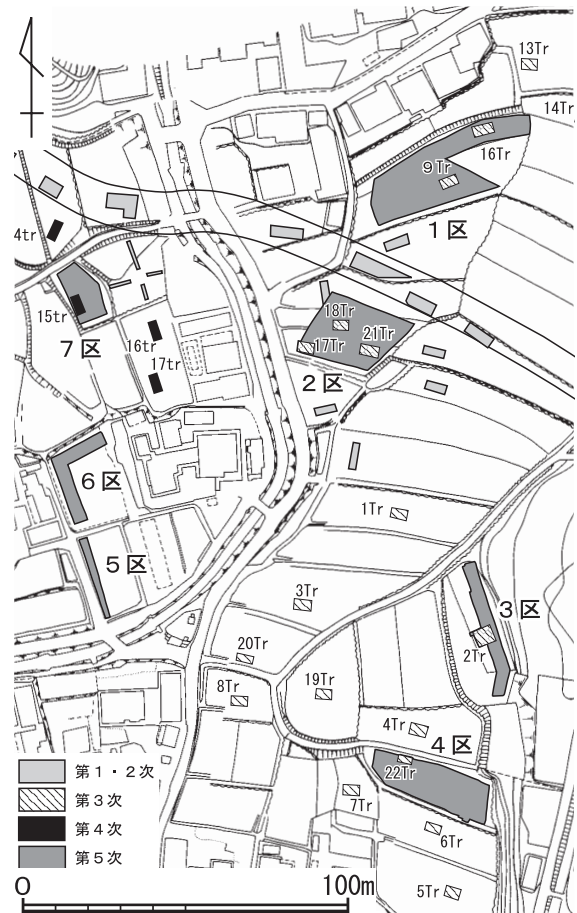
古墳時代の遺構は、遺跡西部の 5・7 区を除く各調査区で検出した。いずれも古墳時代中期の遺構で、1 区で竪穴式住居跡 1 基、2 区で竪穴式住居跡の一部を 2 基、さらに 3・4・6 区で各 1 基を確認し、計 6 基の竪穴式住居跡を検出した。このうち 1 区と 4 区で検出した 2 基の住居跡は導入期の竈を付設するもので、特に 1 区の住居跡の竈は、焚き口に立石をもつ地域的な特色をもつ竈であった。また 4 区では、2 間×3 間の掘立柱建物跡 1 棟を検出している。

歴史時代の遺構は、7 区で飛鳥時代の炉跡 1 基を検出したほか、5 区で奈良時代中葉の竪穴式住居跡を検出した。また 3 区を除く各調査区において、平安～鎌倉時代を中心にした掘立柱建物跡や柱列・柱穴を検出した。

まとめ 今回の調査では、遺跡の広い範囲に設定した各調査区で、縄文時代をはじめ、弥生時代中期～後期、古墳時代中期、飛鳥～鎌倉時代までの顕著な遺構を検出した。このうち特に注目されるのは、古墳時代中期の竪穴式住居跡群（6 基）や掘立柱建物跡（1 棟）などの遺構群である。この時期の住居群は、東に位置する諸畑遺跡や西の室橋遺跡でも確認され、いずれも導入期の竈をもつ住居跡が検出されている。今回の調査によって、古墳時代中期の集落が亀岡盆地北麓に大きく広がることが明らかになった。5 世紀前半に、こうした先進的な技術をもつ地域勢力が台頭し、広い範囲で開発を行う背景について、今後検討していく必要がある。（高野陽子）



第 2 図 調査区全景(右後方に池上遺跡)



第 3 図 調査区配置図

くらがいち 11. 蔵垣内遺跡第13次・こくぶ 国分古墳群

所在地 亀岡市千歳町国分

調査期間 平成21年4月22日～8月12日

調査面積 3,200㎡(K・L・M地区 1,520㎡)

はじめに 今回の発掘調査は、府道亀岡園部線の建設工事に先立って実施した。蔵垣内遺跡は、平成13年度から国営ほ場整備事業に伴い、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会および当調査研究センターが発掘調査を行った結果、縄文時代早期から弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・奈良時代～中世にかけての各時代の遺構や遺物が検出されている。また、当遺跡に重複して、古墳時代後期～飛鳥時代に築造された国分古墳群が所在する。当古墳群は、ほ場整備に伴う発掘調査によって水田下に埋没する多数の古墳が検出され、周知の分を合わせて60基以上の古墳が分布することが明らかになった。このほか、蔵垣内遺跡の西側には奈良時代に創建された丹波国分寺・丹波国分尼寺跡が所在しており、旧丹波国の中心地として早くから開けていたことが窺われる。

調査の概要 今年度は、南部域のB・C・D地区と北部域のI・J・K・L・N地区の発掘調査を実施することになった。今回は、このうち年度の前半期に行ったK・L・N地区の主な調査成果について概要を述べる。

1) K地区 主な検出遺構としては、方形竪穴式住居跡1基(弥生時代後期)、横穴式石室墳1基(国分61号墳)、小石室墳1基(国分62号墳)、集石土坑4基(中世)、柱穴群(奈良・平安時代～中世)などがある。

①国分61号墳 今回の調査で新たに見つかった横穴式石室を内部主体とする古墳で、上部は既に削平を受けており、石室は最下段の側壁を残すのみである。残存部の全長は7.8mを測る。石室のプランは両袖式で、玄室部と羨道部の境に石材を縦に置いて袖石とする。規模は、玄室長3.75m、奥壁部付近の幅1.6m、玄門部幅1.45m、羨道残存部の長さ3.85m、奥側で幅1.65m、開口部付近で幅1.2mを測る。玄室内と羨道の奥部の床面には敷石が施されている。玄室奥半部の敷石に比べて、玄室前半部から羨道部にかけての敷石はやや小ぶりの石材を用いており、意識的



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 京都西北部)

に区画されている。石室床面および石室外に掻き出された土砂から杯・杯蓋・高杯などの須恵器10点のほか、馬具の一部と思われる鉄製品や耳環2点が出土した。墳形は径13m前後の円墳と想定され、出土遺物から6世紀末の古墳時代後期末に築造され、7世紀前半の飛鳥時代まで追葬が行われたことが窺える。

②国分62号墳 上記の61号墳の南西で検出した長さ1.2m、幅0.5mの竪穴式の小石室墳である。上部は削平を受けて石室の一部を残すのみであるが、床面には石室の長軸に直交して前後に石を並べた棺台がある。出土遺物がなく、時期は不明であるが、周辺の調査で検出されている小石室墳の年代観から、飛鳥時代のものと思われる。

③竪穴式住居跡 一辺約6mの方形竪穴式住居跡である。住居壁の周囲に浅い周壁溝をもつ。床面からは主柱と思われる4基の柱穴を検出した。南辺壁に接して貯蔵穴を付設する。出土遺物から弥生時代後期に属するものと思われる。

2) L地区 中世に属する柱穴状ピット群・土坑のほか、北東から南西方向にのびる礫層の広がりを検出した。

3) N地区 蔵垣内遺跡では最も北側に位置する調査地である。古墳～飛鳥時代と思われる2基の方形竪穴式住居跡の一部を検出した。

まとめ 今回の調査では新たに古墳が2基検出され、古墳群内の未調査地にも多数の埋没古墳が存在する可能性が高まった。また、国分61号墳周辺の包含層中からは弥生時代の土器片が多数出土しており、同時代の集落跡の上に古墳群が造られていることが再確認された。

奈良・平安時代から中世の土器が出土する柱穴や土坑が多数検出された。これらの遺構や遺物は、蔵垣内遺跡の西側に隣接する丹波国分寺との関連が考えられ、奈良時代以降の土地利用の変遷や寺域周辺の集落の性格を考える上で興味深い資料になるものと思われる。

(辻本和美)



第2図 K地区遠景(南から)



第3図 国分61号墳(南から)



第4図 国分62号墳(南から)

へいあんきょう 12. 平安京跡

所在地 京都市中京区壬生坊城町48番地16

調査期間 平成21年11月30日～12月18日

調査面積 150㎡

はじめに この調査は、京都府中京警察(仮称)庁舎建設工事に伴う試掘調査である。調査地は、平安京の条坊復原によると左京四条一坊六・十一町、壬生大路に位置する。

ここは、かつて明治45年に開業し昭和47年に廃止された京都市電の壬生車庫が北側にあり、南側には昭和37年開業の京都市交通局の建物跡が存在していた。そのため、遺構・遺物が削平されることなく存在するかどうかを確認する目的で部分的な調査を実施した。

調査概要 1トレンチは壬生車庫跡地の左京四条一坊六町域、2トレンチは京都市交通局跡地の壬生大路の路面およびその東側溝、一部、左京四条一坊十一町域に設定した。

1トレンチでは、地表下1.3mまでは近・現代の盛土を確認したが、壬生車庫や建物跡などにより、これより下位にも部分的に攪乱が及んでいた。盛土の下層には、厚さ約15cmの江戸時代の整地層があり、その下で基盤層となる黄褐色粘質土を検出した。江戸時代に整地されたため、遺構は削平されて浅いものとなっていた。検出できた主な遺構には、中世段階と考えられる東西・南北方向の溝や耕作に伴う溝、井戸・土坑がある。井戸については大半がトレンチの外側になり、部分的に調査を実施するに留まった。これらの遺構からは、中世を中心とした土師器・瓦器・陶磁器片が出土した。そのほか、平安時代の布目瓦が出土した浅い柱穴1か所がある。

2トレンチでは1トレンチ同様、地表下1.3mまでは近・現代の盛土が堆積し、京都市交通局建物跡による攪乱を広範囲に受けていた。そのため、盛土を除去すると基盤層である黄褐色粘質



調査地位置図(国土地理院 1/25,000
京都西北・西南・東北・東南部)

土となり、壬生大路東側溝・路面跡などに関連する遺構は検出できなかった。また、大路の路面部分にあたるためか、柱穴や井戸は検出できなかった。遺物は、平安時代の緑釉陶器・布目瓦、中世の土師器・瓦器・陶磁器片などが出土した。

まとめ 2か所の試掘調査の結果、平安京造営以後の遺構は、後世の攪乱により削平されていた部分もある。しかし、地表下1.5m前後の標高31.3～31.4m付近には、遺構検出面となる基盤層が存在することから、建物基礎などがこれ以上の深さに及んでいない所では遺構・遺物が残存すると考えられる。(増田孝彦)

ながおきょう
13.長岡京跡右京第968次

所在地 長岡京市調子2丁目

調査期間 平成21年4月8日～11月27日

調査面積 2,100㎡

はじめに 今回の調査は平成21年度大山崎大枝線道路改良事業にともなって、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京跡の条坊復原では長岡京右京九条三坊八町、八条大路推定地(新条坊)にあたる。調査地に隣接する右京第825次調査の10～12トレンチ、右京第946次調査のa2・c1地区では、小泉川の旧河道とみられる自然流路のほか、平安時代の溝・掘立柱建物跡などが検出されている。

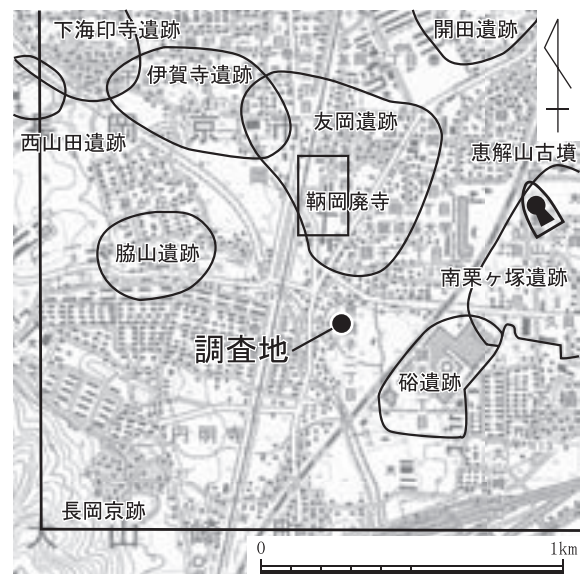
調査対象地は上下2段の耕作地にまたがっている。北西部から張り出す上段は標高約19.4～19.5m、下段は標高約19.1～19.0mを測り、上段の縁辺に用水路が通っている。用水路より北の調査区では近世の第1遺構面と古代・中世の第2遺構面を検出し、南の調査区では古代～近世の遺構を同一面で検出した。

調査概要 近世の遺構 S D20は最大幅6.5m程度を測る流路で、延長50mにわたって検出した。断面形は深さ0.45m程度の「U」字形を呈するが、北部の約15mは断面「V」字形に深さ1.3m程度まで掘り込んでいる。この部分には粘質土が厚く堆積し、滞水状態であったと思われる。

中世の S D30は幅6m以上で、南北40m余りを検出した。西肩に沿って1m前後の幅で深くなっており、南端から約15m付近が最も深くなっている。この部分は常に滞水していたようで、青灰色～黒灰色系のシルトや粘土が堆積しており、西肩には護岸の杭が打たれていた。

古代の S D36は調査区の西半分に広がる流路である。断面形は攻撃斜面に当たる西肩が急傾斜であるのに対して、滑走斜面に当たる東側は非常に緩やかで肩の位置は不明瞭である。下層は遺物をほとんど含まない砂礫層であるのに対して、上層は灰褐色～黒褐色系の細砂を主体とする砂質土や粘質土が堆積している。S D36は平安時代中期にはほぼ埋没するが、その過程で調査地南半の西側から多量の遺物が投棄されていた。その後、S D36を削り込んで落ち込み S X37が形成されるが、やはり西側から多量の土器が投棄され、平安時代後期には埋没する。

まとめ 今回の調査では周辺調査区と同様

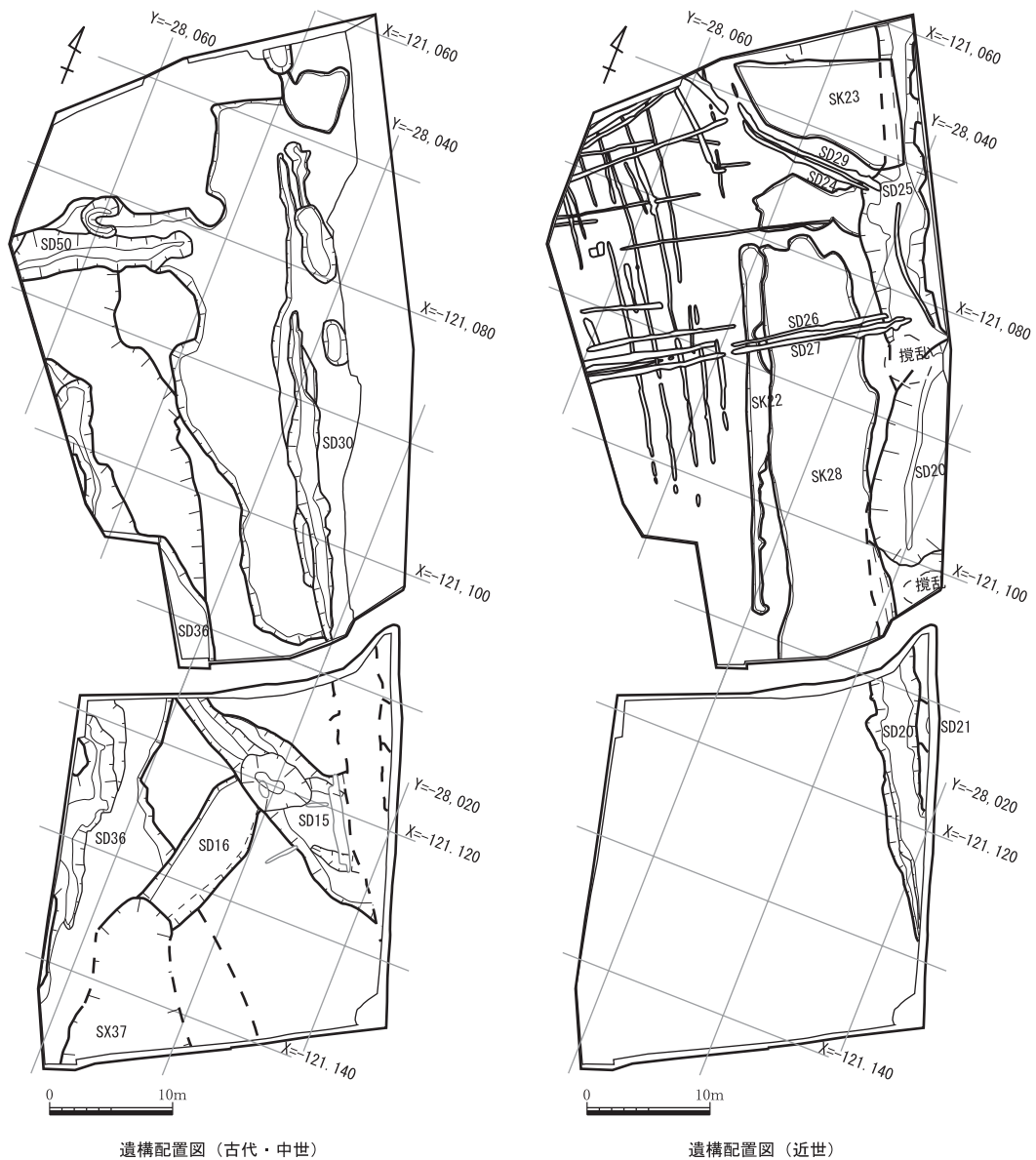


第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

に、自然流路が調査区のほぼ全面にわたって検出された。古代のSD36、中世のSD30、近世のSD20と、流路の位置は次第に東側に移動している。SD20の西側には耕作溝群が広がっていることから可耕地が東に広げられていったことが窺える。

また、SD36を中心に多量の緑釉陶器・灰釉陶器のほか、越州窯系青磁椀・平城宮式軒平瓦・切石の凝灰岩片・銭貨(承和昌寶)などが出土した。これらの遺物構成から、調査地の西側に広がる段丘上に未知の古代寺院が存在した可能性を考慮する必要があるだろう。長岡京期の遺物は少なく、9世紀中頃からの遺物を主体とすることから、平安時代前期には存在したことがわかるが、その創建時期は、軒瓦などからみて長岡京期に遡る可能性も考えられる。廃絶時期はSX37に多量の遺物が一括投棄される時期を最後に遺物がほとんどなくなることから、11世紀中頃とみることができる。

(森島康雄)



第2図 遺構変遷図(S=1/600)

ながおきょう
14.長岡京跡右京第969次

所在地 長岡京市調子2丁目

調査期間 平成21年4月8日～12月22日

調査面積 2,230㎡

はじめに 今回の調査は、京都第二外環状道路の建設に先立ち実施した。調査地は、小泉川によって形成された扇状地に所在し、長岡京跡の条坊復原によると、右京九条三坊二町に想定される。調子地区では、平成16年度より遺跡の範囲を確認する調査に入り、今年度で5年目の調査となる。これまでの周辺部の調査により、弥生時代から中世にいたる集落遺跡の存在も確認されている。昨年度の調査では、a4-1トレンチの西側で検出した土坑内より「舌」をもつ鐸形土製品が出土しており、注目される。

調査概要

1) 縄文時代 b8-1トレンチの土坑 S K37及びb8-2トレンチ包含層から晩期の突帯文土器が出土した。

2) 弥生時代 a4-1トレンチで中期と考えられ、中央に土坑をもつ竪穴式住居跡2基(S H568・702)、甕を埋納した土坑(S K614)を検出した。また、a4-1・2トレンチでは土坑8基(S K565・566・640・641・724・727・735・737)のほか多数のピットを検出した。b-1・2、b9トレンチでは土坑8基(S K35・40・55～58・63・188)ほか流路跡(N R111)を検出した。包含層中からは石包丁が出土した。

3) 弥生時代末～古墳時代 a4-1トレンチで竪穴住居跡2基(S H561・562)、b8-2トレンチで土坑2基(S K184・187)、溝1条(S D186)を検出した。

4) 中世 a4-2トレンチで掘立柱建物跡1棟(S B705)、b8-2トレンチで掘立柱建物跡2棟(S B110・138)、柱列(S A193)を検出した。b8-1・2トレンチでは、流路跡(N R54)が埋まったあとに区画溝9条(S D112～117・148・155・158)、井戸2基(S E119・152)、周縁部に川原石を貼付けた池状遺構(S G146)、土坑4基(S K108・120・153・185)などを検出した。

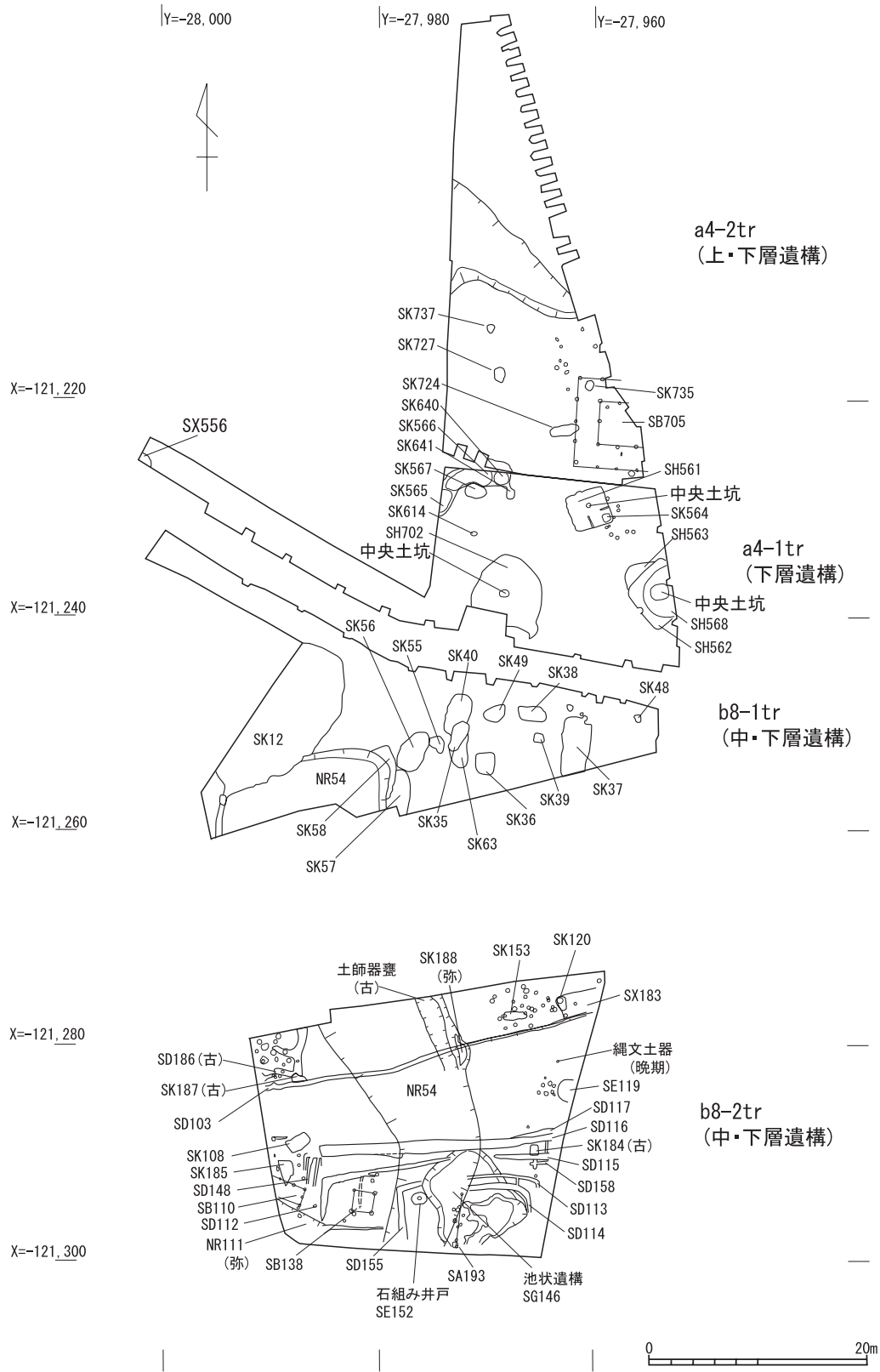
まとめ 今回の調査では、縄文時代の土坑、弥生時代、奈良時代～中世、近世水田跡など各時代の遺構や遺物、各時期の小泉川の旧河道などを確認することができた。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

なかでも、弥生・古墳時代の住居跡や土坑、中世の建物跡や井戸・池状遺構の存在は、それぞれの時代の集落の広がりや、屋敷跡を考える上での大きな手がかりと言える。

(戸原和人・奈良康正)



第2図 検出遺構配置図

ながおかきょう しもかいんじ
 15. 長岡京跡右京第973次・下海印寺遺跡

所在地 長岡京市下海印寺尾流・方丸

調査期間 平成21年6月2日～10月13日

調査面積 1,000㎡(尾流地区)・540㎡(方丸地区)

はじめに この調査は、京都第二外環状道路建設工事に伴う調査である。調査地は、長岡京条坊復原によれば右京七条四坊、西四坊大路にあたる。小泉川の河岸段丘上に位置する尾流地区と、北側に広がる低位段丘上の方丸地区で実施した。この両地区は、縄文時代～近世にかけての集落跡である下海印寺遺跡に含まれ、周辺では多くの調査が行われ縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が多数検出されている。尾流地区では、調査地西側の平成20年度に実施した右京第957次調査で縄文時代後期の土坑5基、弥生時代後期の竪穴式住居跡1基、古墳時代後期の土坑1基、奈良時代の掘立柱建物跡3棟、土坑1基が検出されており、この調査トレンチに接続するようにトレンチを設定した。方丸地区では、平成20年度に行われた右京第947・956次調査の試掘トレンチを含めて調査を実施した。

調査概要 尾流地区では、上層遺構として右京957次調査で確認されていた土坑S K54の延長部を確認するとともに、両調査地にまたがる掘立柱建物跡1棟を検出した。また、新たにトレンチ中央部付近で竪穴式住居跡1基、トレンチ東端で西側角付近だけ残存する竪穴式住居跡を検出した。また、この住居跡を切る形で溝S D130も検出した。いずれも古墳時代後期の遺構である。そのほか、奈良時代の遺物や柱穴を確認したが、掘立柱建物跡を特定するには至らなかった。下層遺構は、小泉川に削られた河岸段丘端で縄文時代後期の土坑2基を検出するとともに、包含層中より小片化した縄文土器が多数出土した。

方丸地区では、昨年度2か所で試掘調査を行っており、その成果に基づき調査トレンチを設定した。トレンチは里道が通じているため3か所に分けて調査を実施した。トレンチ名は調査順にA～Cトレンチとした。各トレンチとも中央部で幅5m、深さ2mの溝S D01を検出している。内部からは12世紀後半を中心とした遺物が出土した。検出したA～Cトレンチの溝の総延長は約60mを測る。直線的な溝ではなく台地の縁辺部の地形に沿ったものと考えられ、Aトレンチ中央付近で台地の下方に向けて溝が曲がっている。水が流れた痕跡は確認できなかった。

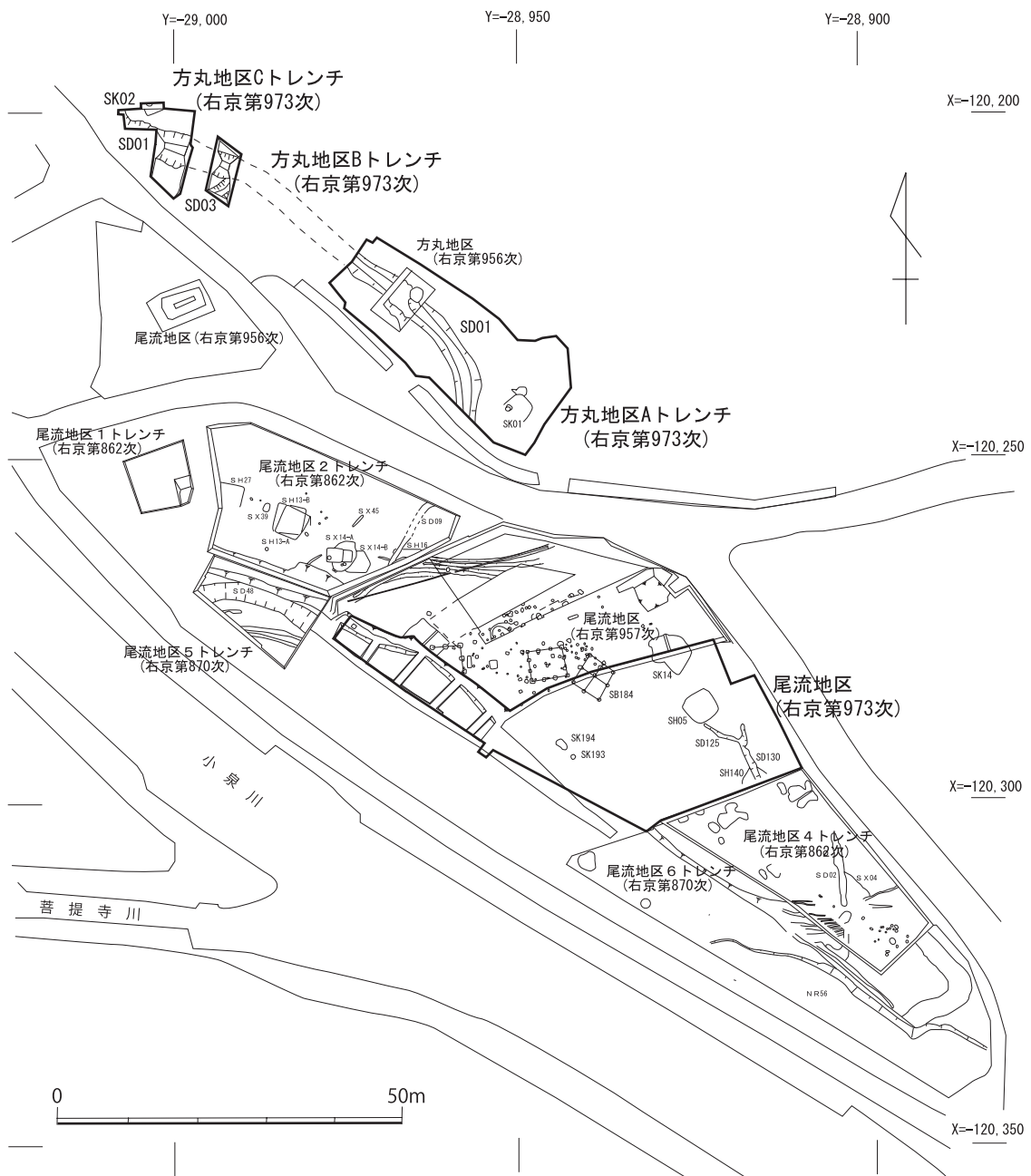


第1図 調査地位置図
 (国土地理院 1/25,000 京都西南部)

そのほか、Aトレンチでは古墳時代後期の土坑1基、Bトレンチでは縄文時代後期の溝1条、Cトレンチでは縄文時代後期の土坑1基も検出した。

まとめ 長岡京期の遺構は確認できなかったが、縄文時代後期の遺構・遺物、弥生時代後期の遺物、古墳時代後期の遺構・遺物、奈良時代の柱穴や遺物を検出した。縄文時代後期の土坑は、右京第957次調査と同様のものであり、下海印寺遺跡の集落域が現在の小泉川付近まで広がっていることが明らかとなった。

(増田孝彦)



第2図 調査地および周辺調査検出遺構配置図

ながおきょう 16.長岡京跡右京第988次・伊賀寺遺跡

所在地 長岡京市下海印寺下内田

調査期間 平成21年10月22日～平成22年1月22日

調査面積 800㎡

はじめに 今回の調査は、京都第二外環状道路の建設に先立ち実施した。調査対象地は、長岡京跡右京八条三坊十・十五・十六町にあたり、旧石器時代から中世に至る伊賀寺遺跡に含まれる。調査区は、平成19年度に右京第927次調査、平成20年度に右京第943次調査が実施された際に、水路や里道として利用されていた部分を移設した後に発掘調査を実施した。そのため、幅5m前後で蛇行する細長い調査区になった。今回の調査では、長岡京期・縄文時代の遺構などを検出した。

調査概要 縄文時代の遺構には縄文時代中期の北白川C式、後期の北白川上層Ⅱ式・元住吉山式の時期のものがある。北白川C式の時期には竪穴式住居跡6基を新たに確認した。そのうち、竪穴式住居跡S H83は1辺が7mを測る隅丸方形の住居跡で、中央部で床面を掘り窪めた炉跡を確認できた。竪穴式住居跡S H78・185・192においても床面で焼土を検出したが、床面を掘り窪めたものではなかった。

後期の北白川上層Ⅱ式の時期には、小泉川により形成された崖面に多量の土器片が集中しているのを確認した。完形に近い土器を含んでいることから、人為的に崖面に投棄されたと考えられる。中期の遺構が近接しているにもかかわらず、中期の遺物を含まないことから、この崖面は北白川C式以後、北白川上層Ⅱ式以前に形成されたと考えられる。北白川上層Ⅱ式期の竪穴式住居跡は今回の調査地内では検出されなかったため、崖面よりやや離れた位置に居住空間があったものと想定できる。元住吉山式の時期には、右京第943次調査で検出していた竪穴式住居跡S H01の続きと土壌S K166を検出した。土壌の内部には骨片が認められた。

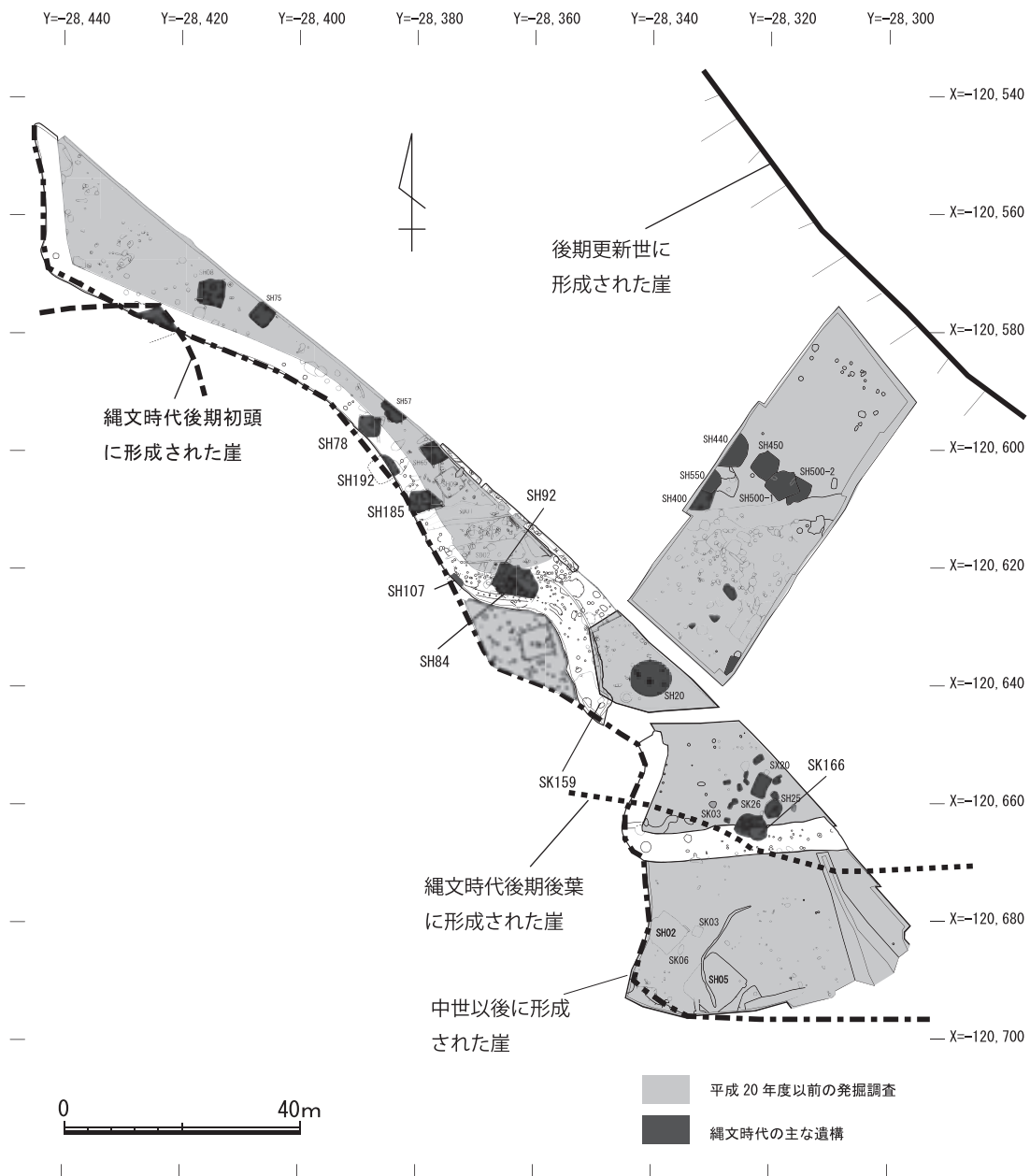
長岡京期の遺構には、平成20年度以前の調査でも検出していた2本の平行する溝の続きを検出し、土橋状に掘り残した遺構を検出した。方形掘形をもつ柱穴を検出し、右京第927次調査で発見した柱穴とあわせ、東西2間、南北4間以上の南北棟に復原することができる。これらの長岡京期の遺構は、現在の氾濫源を形成した崖面によって壊されているため、当時の遺構はさらに南側に広がっていたものと考えられる。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

まとめ 調査地周辺には高さの異なる平坦面が分布しており、細かな崖面が認められる。これまでの調査により、それぞれの平坦面で検出される遺構の年代が判明し、それぞれの崖面や平坦面の形成時期が明らかになってきた。こうした知見によって、自然災害と遺構の変遷を総合的に説明することが可能になりつつある。今後、発掘資料を詳細に検討することにより、遺跡の形成史が明らかになるだろう。

(中川和哉)



第2図 伊賀寺遺跡検出遺構および崖面の形成時期

ながおかきょう 17.長岡京跡右京第986次調査・上里遺跡 かみざと

所在地 長岡京市井ノ内玉ノ上5-1

調査期間 平成21年10月20日～12月3日

調査面積 360㎡

はじめに 調査対象地は、長岡京条坊復原(新条坊)によれば右京二条二坊十五町にあたり、調査地南端を二条条間大路、調査地の西側を西二坊大路が通る。また、縄文時代～中世にかけての遺跡である上里遺跡の範囲に含まれる。

今回の調査地西側にあたる長岡京跡右京第547次調査では、弥生時代の溝・自然流路、奈良時代の柱列、中世の溝・柱列が検出されている。また、近年の京都市域の上里遺跡の調査では、縄文時代晩期の集落跡、弥生時代前期の集落跡と長岡京期の道路側溝や建物跡が検出されている。

この調査は都市計画道路外環状線の建設工事に伴う調査である。

調査概要 調査対象地内に南北に長い4×90mのトレンチを設定した。トレンチの南部では地表下0.4～0.5mで紫暗褐色土をベースとして、砂礫・砂が堆積した北西から南東方向の流路2か所(S D01・S D02)を検出した。流路S D01は幅約3m、深さ約0.7m、流路S D02は幅約3.5m、深さ約0.8mを測る。2つの流路からは弥生時代～古墳時代の遺物が少量出土した。この北側には遺物包含層は認められなかった。下層でも北西から南東方向の流路跡(S D04)を確認した。

トレンチ北部は北東方向に傾斜する地形で、現在の耕作土・客土層の下に灰色土があり、少量の瓦器・土師器の細片が採集できた。トレンチ南部は暗紫褐色土が南に傾斜し、その上に砂・砂礫層が堆積していた。砂・砂礫層からは、縄文時代晩期(滋賀里Ⅲ期)の深鉢口縁部、弥生時代前期(第Ⅰ様式新段階)の壺などが出土した。南部の遺物包含層からは平安時代～中世の遺物が少量出土している。トレンチ南端の二条条間大路が推定される地点では長岡京跡に関連する遺構は検出していない。

まとめ 今回の調査ではトレンチ南部で、弥生時代～古墳時代の遺物が出土する流路跡2か所を検出した。その北側で弥生時代の遺物が混入する流路跡を確認したが、これら以外に顕著な遺構は見られなかった。調査地が小畑川に向かって傾斜する扇状地の先端部にあたることから、長岡京跡に関連する遺構は削平された可能性が高い。



(石尾政信) 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

すずたによろ にしんだい 18. 鈴谷窯第1次・西代遺跡第2次

所在地 長岡京市奥海印寺高山・西代

調査期間 平成21年10月19日～12月22日(鈴谷窯)

平成21年10月5日～10月23日(西代遺跡)

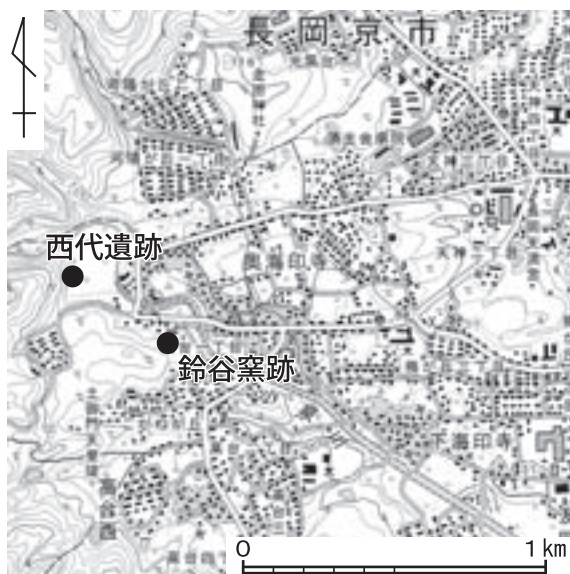
調査面積 600㎡(鈴谷窯)・370㎡(西代遺跡)

はじめに 今回の調査は、京都第二外環状道路の建設に先立ち実施した。調査地は、小泉川右岸の丘陵上に所在し、現在は孟宗竹林として土地利用されている。当地の隣接地では、鈴谷窯が遺跡地図に記載されている。過去に須恵器が採集されており、窯跡の存在が想定されている。西代遺跡は、平成21年度に長岡京市教育委員会による試掘調査で新たに周知された包蔵地であり、主に中世の遺物が出土している。

調査概要

①鈴谷窯

A地区：現地表(標高61m)下約4mの暗灰褐色粘砂質土層の下(同56.8m)より古墳の石室を検出した。規模は、長軸約3.0m、短軸約0.7mの内法を測る。石室は、一辺10～30cmの川原石を用いており、二石分を確認した段階で掘削を中断し、次年度の調査に備えることとした。北西側の小口部分で緩やかにカーブして積まれており、南東側の小口部分の石を欠いているが、現段階では竪穴式石室と判断している。墳丘は、竹林の造成時に削平されたと考えられる。石室の周辺では、70基以上のピットを検出した。出土遺物としては、石室の南東部より家形埴輪の屋根の部分から破風板にかけての破片が出土した。また、トレンチの南東部より古墳時代の須恵器杯身・甕、



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

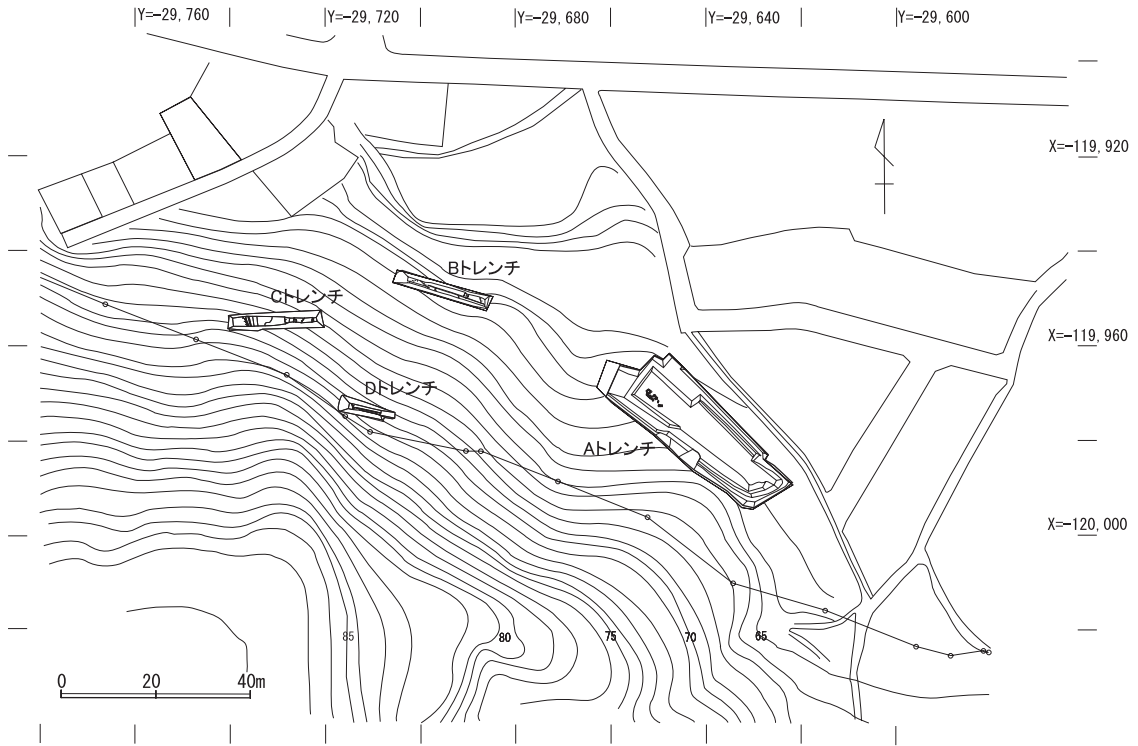
土師器高杯等とともに、歴史時代の土馬等が出土した。この調査地については、平成22年度周辺を拡張して調査を行う予定である。

B～D地区：B地区より砥石、C地区より土師器灯明皿・砥石、D地区より陶器灯明皿・棧瓦が出土したが、顕著な遺構は無かった。

②西代遺跡

対象地内において、9か所にトレンチを設定して調査を実施した。ごく僅かな量の土器小片(須恵器、瓦器など)が出土したが、顕著な遺構はなかった。

(戸原和人・森 正)



第2図 高山地区調査トレンチ配置図



第3図 Aトレンチ検出状況(南東から)



第4図 A-S X01検出状況(上が北西)

19. 新田遺跡第7次

所在地 八幡市内里荒場・深田地内
調査期間 平成21年10月14日～12月15日
調査面積 500㎡

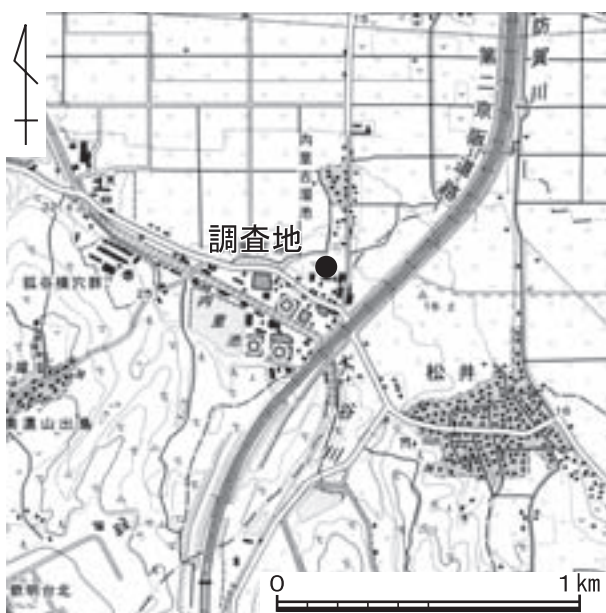
はじめに 新田遺跡は、八幡市と京田辺市にまたがる集落遺跡である。京田辺市域では古墳時代などの遺構、遺物が見つかったが、八幡市域では、遺跡の実態が明らかとなっていない。今回の調査は、街路整備促進事業都市計画道路内里高野道線に伴う事前調査である。

調査概要 道路計画路線内にA、B1、B2、C、D、F、G地区の計7か所の調査区を設定した。まず、耕作土を重機により除去し、その後、人力掘削により遺構の検出作業を行った。

調査の結果、A・D地区を除く調査区では、河川から流入した粗砂及び細砂が水平に堆積する状況で、遺構面を確認することはできなかった。

調査地の北部に位置するA地区では、近世に属する東西方向の溝跡を検出した。溝は、肩部に竹を打ち込で護岸している。堆積状況と溝の位置関係から灌漑用の水路と考える。なお、重機による断ち割りを行ったが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

調査地の南端に位置するD地区は、南北に延びる府道の隣接地に設定した。調査前の状況では、南側から派生した美濃山丘陵の端部に立地するように思われたが、調査の結果、現地表下約3mまでが現代の盛り土層であり、その直下において耕作面を確認した。調査の最終段階でさらに現地表下5mまで掘削したが、灰色細砂層の堆積を確認したものの、遺構・遺物を確認することはできなかった。なお、基盤層はさらに深いものと思われる。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

まとめ 今回の発掘調査では顕著な遺構・遺物を確認することはできなかった。調査地は土層の堆積状況から見て、河川の堆積による砂層が堆積しており、当該地周辺域は、河川の氾濫原と考えられた。

今回、発掘調査を行った調査地点は、河岸段丘の直下に位置しており、今まで新田遺跡で確認された遺構・遺物と関連することが予想された。しかし、近世の耕作溝などの検出にとどまった。今回の調査により河岸段丘直下の状況を把握できたことは、周辺の遺跡の立地を考える上で重要な所見を得たと言える。(柴 暁彦)

20. 国宝慈照寺銀閣

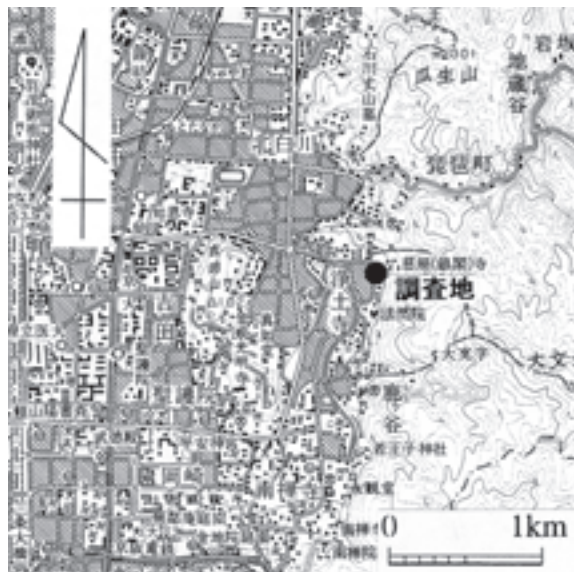
所在地 京都市左京区銀閣寺町 2 番地
 調査期間 平成22年 6 月15日～6 月29日
 調査面積 20㎡

はじめに 慈照寺は、通称銀閣寺として知られている。室町幕府第 8 代将軍足利義政が営んだ山荘東山殿を前身とする。長享 3 (1489) 年には観音殿(銀閣)が上棟するが、翌延徳 2 (1490) 年に義政は銀閣の完成を見ることなく没する。以後、義政の遺命により、東山殿は慈照寺という寺院となる。その後、戦国期の争乱によって、東求堂・銀閣以外の建物は失われ、慈照寺は荒廃する。江戸時代初期の慶長 19 (1614) 年以降に大規模な整備が行われ、慈照寺はほぼ現在の姿に近い状況になったとされる。大正 3 (1914) 年には、銀閣の解体修理が行われ、礎石の下にコンクリート基礎が入れられる。

この調査は銀閣保存修理工事に伴うもので、昨年度と今年度に実施した。なお、調査は建物がある状況で実施しており、掘削は最小限にとどめた。

調査概要 銀閣の内部では、大正時代の化粧土などの下層で、堅く締まった灰黄色砂質土を、ほぼ全面にわたって検出した。大正時代以前の整地層と考えられる。また、ほとんどの礎石にはコンクリート基礎が入れられていたが、銀閣北辺の礎石 1～3 にはコンクリート基礎が見られなかった。これらの礎石は大正時代に動かされていない可能性がある。北辺の礎石は、灰黄色砂質土上に据えられている。下層には、堅く締まった茶褐色砂質土や灰色砂質土があり、同時期の整地層と考えられる。これらの層は、攪乱された様子がなく、現在地に銀閣がたてられた時期の整地層と考えられる。なお、これらの層には 15 世紀後半頃の遺物が含まれる。さらに下層には炭片や拳大の礫を含む黒灰色砂質土があり、13 世紀後半頃の遺物を多数含む。

銀閣外側では、西辺・南辺で、帯状の橙黄灰色粘質土を検出した。西辺では、北方向に伸びる状況を確認しているが、北辺側には屈曲していない。この粘土帯の外側で、大正時代以前の盛土を確認した。その中から、16 世紀の信楽焼播鉢片が出土した。粘土帯を境にした銀閣内側と外側では、盛土の時期が異なる可能性も考えられる。また、南東隅の礎石 15 の外側では、旧景石とみられる石列を検出し



第 1 図 調査地位置図
 (国土地理院 1/50,000 京都東北部)



第2図 大正時代以前整地層(東から)



第3図 南東隅検出の旧景石(南から)

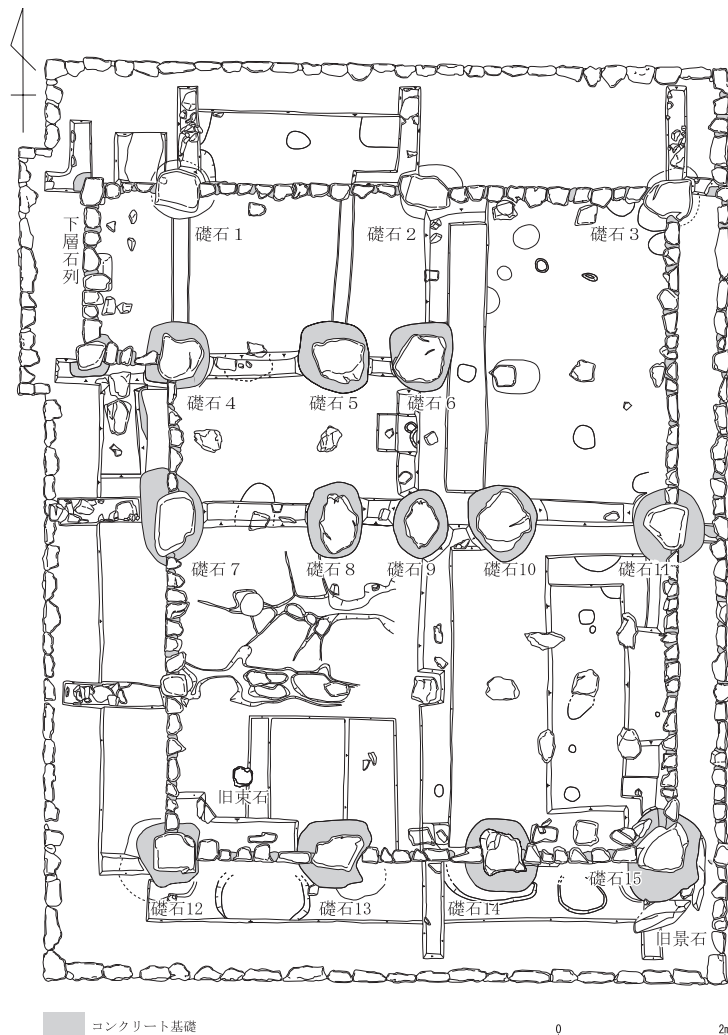
ており、北側の池がさらに銀閣側に寄っていた可能性も考えられる。

このほか、大正時代の化粧土などを除去した段階で、南西隅部から礎石1個を検出した。大正時代以前の整地層上に置かれており、旧床東とみられる。このほかに、土坑状・ピット状の窪みや、杭跡状の小ピットを検出した。ほとんどが、大正時代以前の整地層の上で検出した。

まとめ 今回の調査では、銀閣母屋部分の礎石のうち、北辺の3石については、大正時代以前の段階から動かされていない可能性が高いことを確認した。大正時代以前の層からは、15世紀後半頃の遺物が出土しており、明らかに近世のものと思われる遺物は含まれていない。また、池と銀閣との関係も、さらに検討を要する要素が見つかった。

いずれにしても、小部分の調査であり、可能性の域を出ない。今後の調査に期待したい。

(引原茂治)



第4図 銀閣平面図

近世の京都

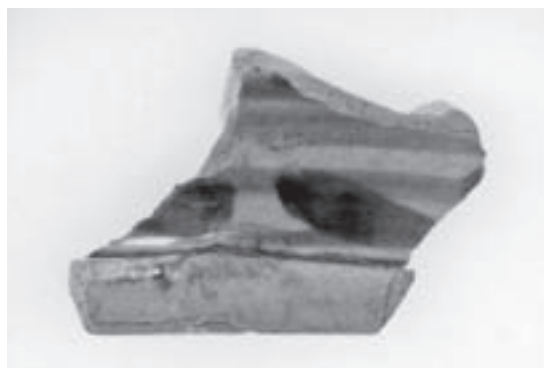
はじめに

豊臣秀吉の天下統一から江戸時代の終わりまでの時期を近世と呼びます。近世の遺跡が注目されるようになったのは、そう古いことではありません。京都府において近世の遺跡調査が行われるようになったのは、ほぼ30年くらい前からです。中でも、近世大名が築いた城跡は、近世遺跡として、早くから調査対象になっています。京都のみならず、全国的にみても、近世大名の経営した城下町が母体となっている都市は多くあります。したがって、近世の城跡は、その地域の人たちにとって、もっとも身近な親しみやすい近世遺跡と言えましょう。ここではまず、一般的に親しまれている城跡をはじめに取り上げたいと思います。

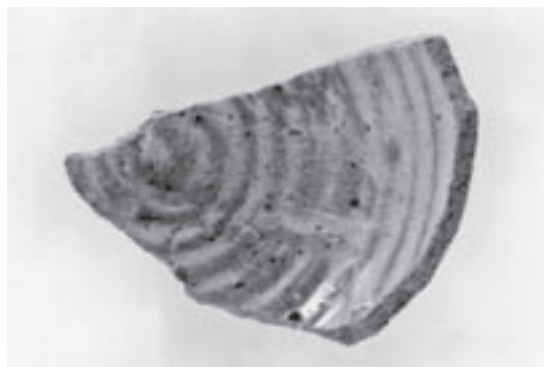
城跡の様子

豊臣秀吉は、京都の街の再編を行い、市街地を土塁で囲い込む御土居を築きました。それまで、支配拠点や防衛拠点を囲んでいた城壁を街の周囲に築きました。このような街を囲む城壁は、日本の古代の都城にも見られませんでした。ヨーロッパや中国などの城壁に囲まれた街のような景観は、まさに京都の近世の幕開けを象徴する光景と言えましょう。現在、御土居は京都市北部の西加茂や鷹峯などに断片的に残るのみですが、南側の下京区などでも、発掘調査により御土居の基底部分やそれに伴う堀跡などがみつかっています。

京都府北部の丹後地域にある宮津市宮津城跡は、現在市街地化して、その痕跡は地上にはほとんど残っていません。宮津城は、織田信長から丹後を与えられた細川藤孝によって、最初に築かれました。宮津湾に面した海辺に位置しています。関が原の合戦以後、京極氏などが城主となっています。発掘調査で石垣や堀の跡などがみつかっています。最近の調査で、17世紀前半頃に、頻繁に造り替えが行われたことがわかっています。また、堀の中などからヨーロッパ製の陶器や朝鮮王朝(李朝)の椀などが出土しています。ヨーロッパ陶器は茶道の水指として、朝鮮王朝の椀は茶碗として使われたものと考えられます。近世武家文化の



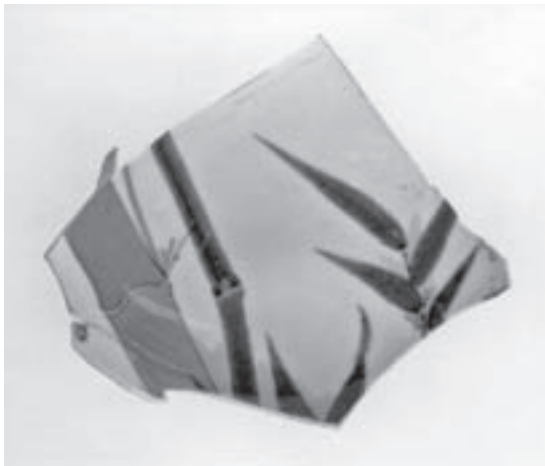
宮津城跡出土のヨーロッパ陶器



宮津城跡出土の朝鮮王朝陶器

一端を偲ばせます。同じく北部の舞鶴市田辺城跡は、宮津城跡と同じく、市街地化しており、本丸部分がその面影を残しています。最初に築城したのも、同じく細川藤孝です。江戸時代には牧野氏などが城主となっています。舞鶴湾に注ぐ伊佐津川河口に位置しています。発掘調査で、良好な状態で残る石垣や堀跡などが見つっています。また、石垣の基礎になっている桐木も確認されています。

丹波地域では、南丹市園部城跡で調査が行われています。園部城は、但馬出石から丹波園部に転封された小出吉親によって、江戸時代の初めに築かれ、以後、幕末まで小出氏の居城となりました。小出吉親は城主格の大名ではないので、正確には園部陣屋と呼ぶべきかもしれません。ただ、今に残る城門や隅櫓の様子は、城と呼んでも差し支えない景観です。城跡は現在学校敷地となっており、その改築等によって発掘調査が行われています。本丸跡では、石組の溝などがみつっています。また、堀の調査では、18世紀頃の九州肥前(佐賀県)産の鍋島焼皿などが出土しています。鍋島は、佐賀藩直営の焼き物であり、大名間などの贈答用に作られた精巧な磁器で、原則として一般に出回ることにはないとされている焼き物です。いかにも近世大名の城跡からの出土遺物としてふさわしいものです。なお、亀岡市以北では、これ以外に鍋島の出土は確認されていません。



園部城跡出土の鍋島



中山城跡近世墓遺物出土状況

原則として一般に出回ることにはないとされている焼き物です。いかにも近世大名の城跡からの出土遺物としてふさわしいものです。なお、亀岡市以北では、これ以外に鍋島の出土は確認されていません。

亀岡市丹波亀山城跡は、織田信長から丹波を与えられた明智光秀が、丹波支配の本拠地として築いた亀山城に由来します。その後、豊臣氏の時期を経て江戸時代へと受け継がれます。特に江戸時代初めには天下普請によって改修されています。これまでの調査で、中級武士の屋敷跡の地割などを確認しています。

山城地域では、淀城跡の調査が行われています。淀城は江戸時代初めに築城されたもので、淀君の城として有名な淀城とはちがいます。市街地の中に本丸跡の石垣や水堀が残っています。天守台の調査では、天守台地下に石積みの地下室があったことが確認されています。

墓の様子

丹後・丹波地域では、古墳等の発掘調査に伴い、墳丘上などに設けられた近世墓を調査しています。方形の座棺を用いて埋葬しているものが多く、

庶民クラスの人々の墓とみられます。注目されるのは、舞鶴市中山城跡で見つかった墓です。尾根上に、小さいマウンドをもつ6基の墓が並んでいます。このうちの4基には、錫杖が副葬されていました。僧侶もしくは修験道に関係する人の墓の可能性も考えられます。また、京都市内の法成寺跡(元立命館大学広小路学舎跡)の調査では、花崗岩の切石を用いた石槨の中に銅板張りの木棺を納めた、立派な墓が見つかりました。場所的に、公家の墓と考えられます。なお、この墓は、すでに改葬されていました。

その他の様子

福知山市戸田遺跡は、由良川中流域に位置する遺跡です。由良川の洪水の被害を直接受ける立地になっています。この遺跡の調査では、江戸時代を通じて各時期の陶磁器類が多数出土しました。また、東南アジアからもたらされたと考えられる甕片も出土しました。これらの陶磁器類は、江戸時代に、遺跡周辺の地域が、由良川を使った水運による交易などで、かなり繁栄していたことをうかがわせます。今ではごく普通の集落ですが、かつては違う様相であったことも想像できます。同じ意味で、木津川流域に位置する木津川市木津遺跡でも同様の様子が想定されます。

南山城地域の江戸時代を考える上で、興味深い遺構が京田辺市の三山木遺跡で見つかっています。それは、丸太と板材で護岸された小さな池です。内部は丸太で4区に仕切られています。寛政9(1797)年の年紀をもつ絵図に、この池とみられる池が描かれており、「クスハラ池」という池の名前が書かれています。池の名前のほかに、「浅井様入」とも記されています。浅井氏は、江戸時代に田辺地域に支配地を所有していた旗本クラスの小領主です。この池に何らかの利権を持っていたと考えられます。絵図には、このような小さな池が30か所描かれており、池の名前や公家、武家などの名前が書かれています。それぞれに何らかの利権が付随していたものとみられます。京都周辺では古くから皇室領、公家領、寺社領などが複雑に入り組んでおり、それに武家領なども加わり、複雑な状況がみられます。このような小さな池の存在は、そのまま、江戸時代における山城地域の支配の形を物語るものと言えましょう。なお、池の存続期間は、17世紀末ころから19世紀中頃と考えられます。徳川幕府の崩壊とともに機能を停止して埋められたのでしょうか。絵図に描かれている30か所の池は、現在ひとつも残っていません。

以上、断片的になりましたが、京都の近世の一端をたどってみました。(引原茂治)



戸田遺跡出土東南アジア陶器



三山木遺跡の池

天下人の政庁（聚楽第）

聚楽第は、豊臣秀吉が上京のはずれに築いた城郭です。天正16(1588)年の春、後陽成天皇の聚楽第行幸が行われましたが、この行幸は、先頭が聚楽第に到着した時に、最後尾はまだ御所を出発していなかったほどの壮大なものでした。この時の様子は、近年、尼崎市と上越市で発見された屏風からも窺い知ることができます。行幸の2日目、諸大名は天皇の前で秀吉の命に背かないことを誓う起請文を提出しました。これによって、諸大名や家臣が朝廷の官制に編成され、その頂点に関白秀吉が立つ豊臣政権が成立しました。聚楽第は、秀吉が名実ともに天下人となったこの重要な儀式のために用意された舞台でした。聚楽第は関白の政庁であったので、天正19年に甥の豊臣秀次に関白職とともに譲られました。そして、文禄4(1595)年に関白秀次が謀反の疑いで切腹させられると秀吉の命で破却されてしまいます。

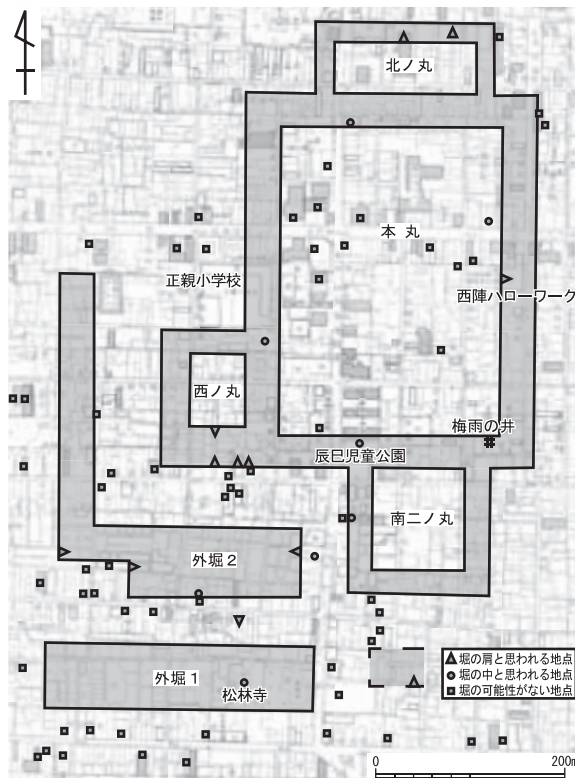
平成3年に大宮通中立売下ル和水町で行われた発掘調査では、深さ8.4m、幅約40mと推定される本丸東堀が発見されました。破却に際して堀を埋め戻した土からは、本丸で使用されていた大量の瓦が出土しました。このうち、軒丸瓦・軒平瓦・鬼板瓦・熨斗瓦などの軒先と棟を飾る瓦のほとんどは金箔瓦でした。これらの瓦は使用時期の特定できる基準資料として国の重要文化財に指定されています。

徹底した破却によって地上からほとんど姿を消して幻の城とも言われていた聚楽第でしたが、この発見をきっかけに復原研究が大きく進展し、現在では、聚楽第の堀の位置を推定することが

可能になりました。

聚楽第の堀の推定位置を地図上に描くと、本丸東堀は平安京の大宮大路、本丸北堀は平安京の一条大路の位置にあたります。本丸の北東隅が平安京大内裏の北東隅とほぼ一致しているのです。北ノ丸は秀次の時代に付け加えられた郭の可能性が高いので、秀吉の時代の聚楽第は、平安京大内裏の北東隅にピッタリと位置を合わせるように築かれたと言えます。

小牧・長久手の戦いで徳川家康に敗れた秀吉は、武力による天下統一戦略から天皇や朝廷の権威を利用する戦略に変更を余儀なくされてきました。関白政権の確立を象徴する儀式の舞台となる聚楽第を築く場所として、平安京大内裏の故地を選んだことは偶然ではないでしょう。
(森島康雄)



聚楽第跡復原図

指月城の盛り土（伏見城跡）

今から420年ほど前、伏見にある桃山丘陵には天守を中心に、二の丸や三の丸といった郭が造られ、その周囲に大名屋敷が建ち並び、現在の市街地に城下町が建設されました。桃山高校は毛利長門東町という所にあり、毛利氏の大名屋敷があったところとされています。平成5年に桃山高校の校舎の改築に際して、発掘調査を実施しました。

表土下、50～70cmの深さで建物跡や柵列、土坑などが見つかりました。調査対象地南半は、既設の校舎の基礎によって大きく攪乱を受けていました。その中の土層を見ると、建物跡などの遺構が見つかった面より1m下に大量の瓦が廃棄されていました。この中に金箔瓦がありましたので、伏見城関連のものに間違いありません。最終的に、西に下る傾斜面に最大2m程度の盛り土がなされているのを確認しました。

この調査地の西隣の調査地では、上層から掘られた土坑からも大量の金箔瓦が出土しています。これらのことから、盛り土層を挟んで上下の遺構は、ともに伏見城関連のものと判断されました。

伏見城は豊臣秀吉が隠居屋敷として文禄元(1592)年に造営に着手し、その後、大規模な城郭へと造り直されます(指月伏見城)が、文禄5(1596)年の大地震によって倒壊してしまいます。翌日、秀吉は木幡山に伏見城を再建することを命じます。下層の遺構は指月伏見城、上層の遺構は木幡伏見城の遺構と判断されます。

現在の桃山高校敷地の西側は、4mの崖面が南北に連なっていますが、これらは人工的なものだとわかりました。木幡山伏見城を築造するにあたり、丘陵を削り、土砂を盛り上げて建設に邁進した秀吉の並々ならぬ思いと、彼の絶大な権力の一端が偲ばれます。

(岩松 保)



桃山高校の調査地（西から；左奥に復興天守）



上層で検出した建物跡（西から）



盛り土層下面に集められた瓦



指月伏見城段階の地形（西南から）

京都の富者 勘兵衛の屋敷跡



発掘調査地の空中写真（下方建物が京都府庁）



多くの遺物が出土したゴミ捨て穴の断面写真



出土した漆器椀・桐文道具瓦・中国製男子像
切磋琢磨しながらも親交を深めたのではと想像が膨らみます。

ここで取り上げる勘兵衛町は、京都市上京区にある京都府庁西側に位置します。具体的には北は出水通、東は西洞院通、西は油小路通、南は下立売通に囲まれた町域のほぼ中央に位置しています。勘兵衛町については、慶長年中（1596～1615）に京の富者として名を馳せた三人の勘兵衛のうち一人が居住したことが町名の起源であると、江戸時代の京都の地誌類を集めた『京都叢書』に記載されています。

発掘調査では、現在の勘兵衛町と丁字風呂町及び西大路町の町境と一致する場所で柱列や溝などを確認しており、京都の町割りが、江戸時代から踏襲されていたことがわかりました。

さて、勘兵衛がどのような活躍をしたかについては、わからないことが多いのですが、富者としての勘兵衛が有した財力の一部を示すかのような遺構と遺物を確認しました。発掘調査地は、勘兵衛町の南東部分に当たり、そこで一辺4m以上、深さ2mのゴミ捨て穴を確認しました。穴の底部が四角形に掘り込まれ、壁が垂直に立ち上がることから、破壊される前は財宝などを火災から守るための石室だったと考えられます。この石室からは、中国製磁器や朝鮮王朝磁器をはじめ織部焼や志野焼などの陶器類、調度品や漆器椀、箸、下駄、刷毛、銭貨、釘、鞘金具、硯、碁石、砥石、焼き塩壺などが多量に出土しました。特に、中国製の華南三彩盤と同じ釉調をもつ男子像は、今のところ国内に出土例がありません。

勘兵衛屋敷の北側には、茶屋四郎次郎邸が所在しており、同時代に活躍した二人が、互いに

（小池 寛）

いかさま師の末路

京都市内は、かつて平安の都があった場所です。この地を発掘調査すると、千年以上にわたる都人の生活がしのばれる多くの焼き物が、ごみ跡の中に捨てられています。また、掘立柱建物の柱穴や溝なども多数あり、それらを掘り切って調査が完了した頃には、平らな地面がほとんどない、月の表面のようなでこぼこ状態なのです。

今から20年ほど前、京都府庁の庁舎新築のため、発掘調査をしました。ここは、かつて南北方向の西洞院大路と東西方向の近衛大路の交差点であったところです。平安時代の道幅が24~30mあったものが、徐々に町屋に侵食され、戦国時代には西洞院大路は10mほどになっていました。

この交差点の南東部で金箔瓦を含む瓦溜りと一部重複した遺構が見つかりました。そこには、数片の骨片と、骨角製のサイコロ1点、鉄製のナタ1点があったのです。おそらく、墓であったのでしょう。このサイコロは一部欠けていて、中を見ることができました。なんと内部は球形に削り貫かれていたのです。出土した場所は道路に近いところで、おそらく築地に葺かれていた瓦を捨てた場所に墓を作っていたのです。

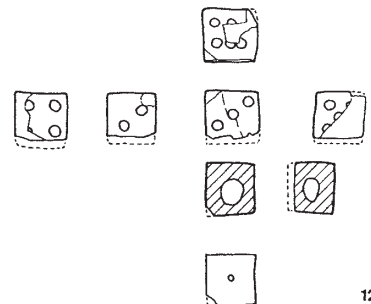
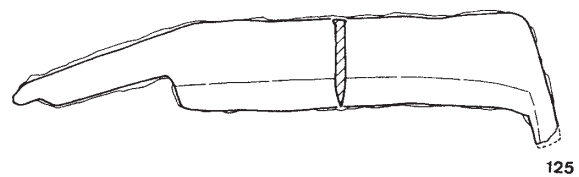
サイコロは普通のとおり目をつけていました。すなわち、1と6のように裏面の数字を足すと7になるものです。しかし、中は一方に偏って削り貫かれていたのです。

イカサマサイコロの出土です。中に砂でも入れれば一方が重くなり、この場合は1の数字側に穴を開けていたようです。ナタはこの墓の主が建築関係の仕事に従事していたことを窺わせます。1日の作業が終わり、サイコロを振って賭け事をしていたのでしょうが、イカサマが発覚して・・・。

約400年前の出土品で、一つのドラマが作れそうです。
(伊野近富)



出土したいかさまのサイコロ



サイコロとナタの実測図

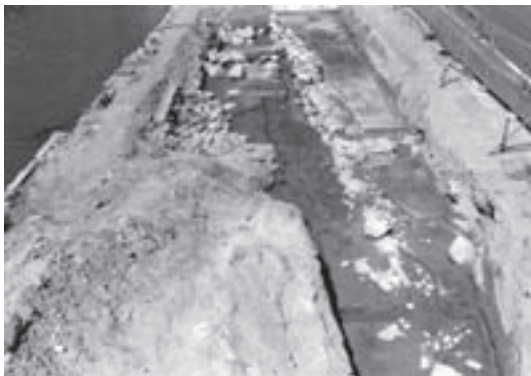
城郭の造り替え（宮津城）



宮津城の現風景（中央は大手川：南から）



三の丸隅舛形虎口の石垣（北東から）



三の丸南西部 屋敷地を区画する石垣
（南南西から）

宮津城跡は、宮津市鶴賀に所在し、湾に面した大手川河口部に築かれた近世の平城です。本丸と二の丸は廃城後の市街地化により、城の痕跡をとどめていませんが、三の丸や城下町については江戸時代以来の町割りを残しており、江戸時代の絵図と対比することができます。

宮津城の歴史は天正8（1580）年に細川藤孝によって築造され、慶長5（1600）年の関が原の戦いの前に自ら宮津城を焼き払い、田辺城（舞鶴市）に籠城し、西軍の兵力の一部を足止めしたと伝えられています。この功により細川氏が九州（豊前国）に封じられた後、京極高知が田辺城に入り丹後を支配し、晩年、宮津城に移り大規模に改修しました。高知が元和8（1622）年に死ぬと、宮津藩主となった京極高広により城の再整備がおこなわれ、寛永2（1625）年に近世の城として作り替えられ完成したとされています。

近年の調査では、三の丸南西隅でみつかった石垣は、絵図にも残る舛形虎口を構成する遺構で、石側の南北端に土塁が取りつく構造に復原できます。この舛形虎口が作られた時期は、京極氏が改易処分を受けた後の寛文7（1667）年におこなわれたと考えられます。三の丸南西部では、屋敷地を画する石垣がみつき、出土遺物の年代からは細川期のものではなく、慶長5年に京極高知が丹後に入った時期に築かれた可能性があります。また、この石垣を埋める大規模な改変が行われたのは、京極高広が藩主になってから城下の整備をおこなった元和8（1622）年から寛永2（1625）年の間と考えられます。発掘調査によって、初期の宮津城の遺構は、比較的短期間に改変を繰り返されていることがわかりました。（村田和弘）

木津遺跡の江戸時代陶磁

木津川市の木津遺跡第4次調査は、木津警察署の建て替えに伴う発掘調査でした。検出された溝や土坑から多くの陶磁器片が出土し、室町時代前期から江戸時代中期に至る日常雑器の変遷が明らかになりました。

南西から北東方向に延びる断面V字形の溝には、14世紀から15世紀前半までの土師器皿が大量に捨てられていました。近世の土坑や池に切られた溝からは、15世紀後半の土師質や瓦質の羽釜や播鉢が出土しました。その溝を切っている池からは、16世紀前半の土器や陶磁器が出土しました。もう1か所の池からは、16世紀中頃から後半の土器・陶磁器が出土しました。土師器皿や羽釜のほかに、美濃産の天目茶碗や灰釉の皿や椀、中国製の青花小皿が含まれます。

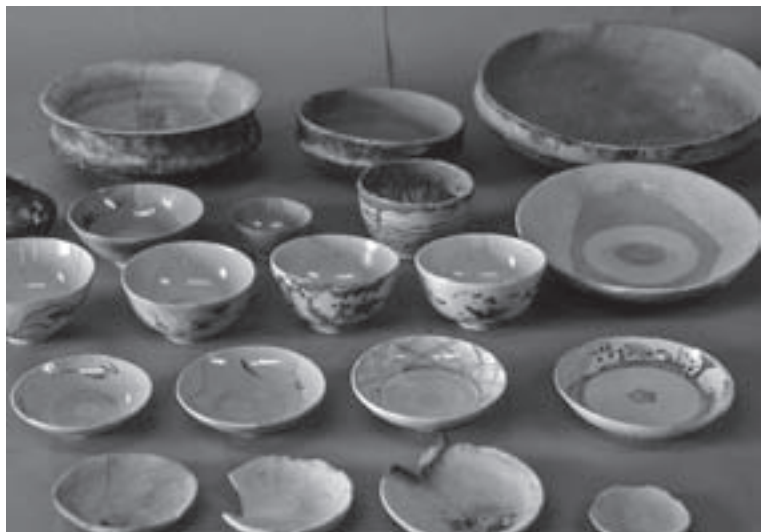
長楕円形の土坑からは、17世紀後半の遺物が出土しています。ここから出土した焙烙^{ほうらく}は、16世紀の土師器羽釜と、17世紀末から18世紀前半の焙烙の中間的な形をしています。木津地域に特徴的な焙烙の原型が羽釜であったことがわかります。18世紀の入ると、焙烙の形に退化も認められ、年代の目安にできるほどです。

瓦質の甕を埋置した、墓とみられる遺構からは、肥前陶器(唐津)の銅緑釉皿が出土しており、17世紀末頃の年代が与えられます。また、便所の可能性が考えられる埋桶遺構などからは、17世紀末から18世紀前半の陶磁器類が出土しています。肥前磁器(伊万里)のくらわんか手の染付椀・皿類が圧倒的に多く、肥前陶器の刷毛目椀がこれに次ぎます。ほかにも肥前磁器と思われる青磁の大皿などがあります。包含層からも、肥前陶器三鳥手の大鉢が出土しています。

以上のように、遺構の切り合い関係から、それぞれの土器群の先後関係がはっきりとわかりました。400年間にわたって土器群が数珠つなぎのように連なっているように見えますが、実は、17世紀初頭頃から中頃の資料だけがすっぽりと抜けています。

京都市内の資料によると、16世紀末から17世紀初頭にかけては、黄瀬戸・志野・織部・唐津などの侘び茶関係の陶器が大量に出回り、その後、ほとんど唐津系陶器一色になり、中頃には初期伊万里系染付磁器が出現し始めます。

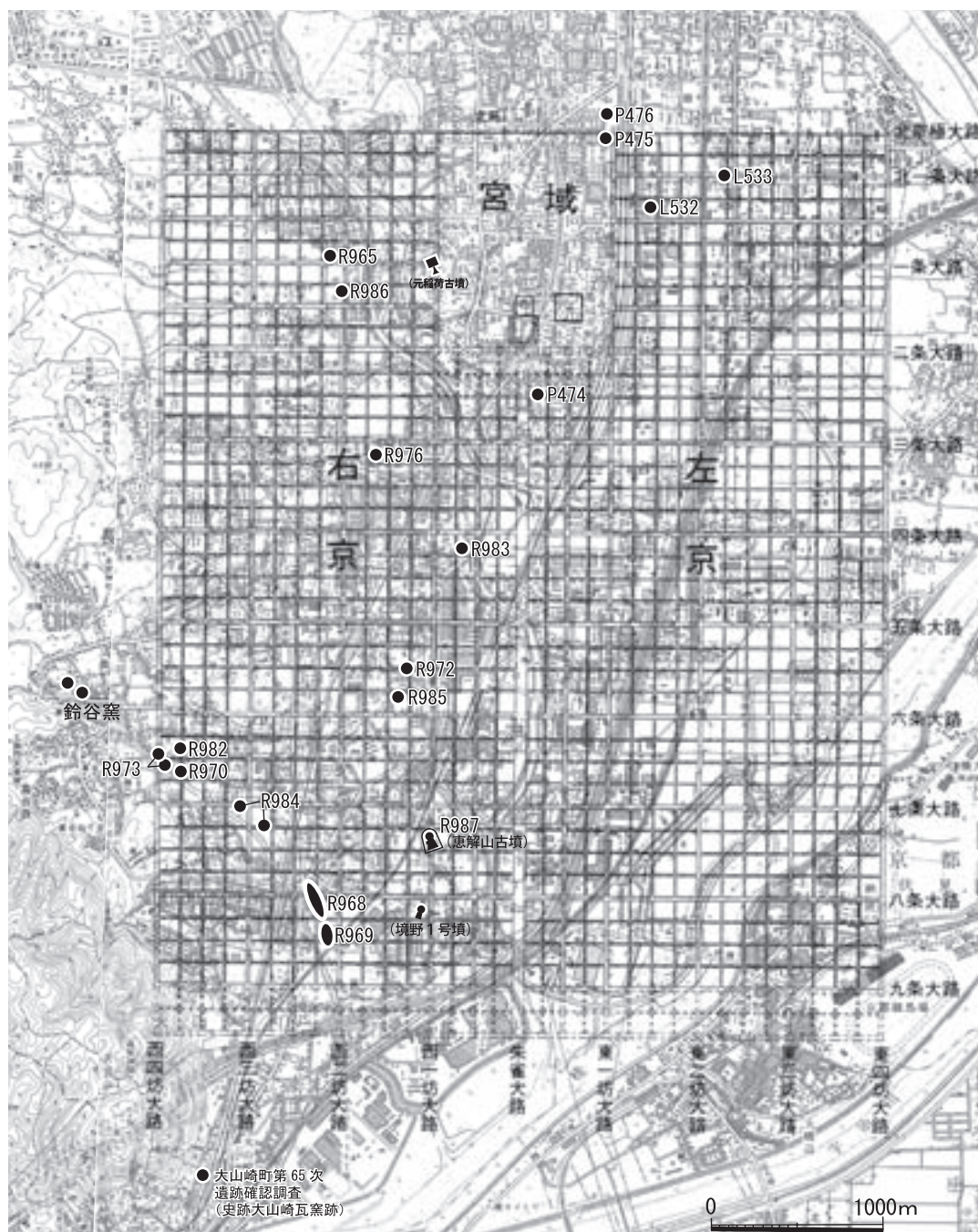
16世紀にはまだ中世的でしたが、18世紀の食器は現代に直結しています。今後、京都などの大都市以外の地域でも、その中間の17世紀の様相の解明が期待されます。(小山雅人)



出土した日常雑器類

長岡京跡調査だより・107

長岡京跡における発掘調査の情報交換及び資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターを会場に、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成21年10月から平成22



調査地位置図 (1/40,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

年1月の例会では、宮域4件、左京域3件、右京域16件、京域外6件、あわせて29件の調査報告があった。そのなかで、重要な成果が得られたものについて報告する。

宮域 宮跡第474次調査(向日市上植野町)では、長岡宮の南に面する地区において、宮造営時の整地に係わると考えられる遺構が検出された。検出されたのは土留めのための杭が斜めに打ち込まれた溝で、宮を「雛壇」状に造成する作業の中で、排水のための溝として利用されたと判断された。宮域の北東外郭に位置する宮跡第476次調査(向日市森本町)では、古墳時代の東西方向の流路を検出した。この溝は北岸が調査区外で規模を確認できなかったが(3.5m以上)、埋土から古墳時代の土器類(庄内式土器～須恵器)に混じって、笠形状木製品が1点出土した。

左京域 左京第532次調査(向日市森本町)では、宮域の東辺に近い左京一条二坊七町のほぼ中央部で調査が行われ、正方位の東西方向に並ぶ3基の大形の柱穴が検出された。全て柱の抜き取り痕跡をもち、柱掘形は一辺0.9mと大規模で、柱間寸法は3.0m(10尺)を測る。この建物の全貌は明らかではないが、柱掘形の規模や柱間の寸法は、京内離宮・官衙、貴族邸宅の中心的な建物の大きさに匹敵する。もし官衙や貴族邸宅であるならば、一町域を占有する宅地とも考えられ、一町内のちょうど中央部分に位置していることから、東西棟であれば主殿、南北棟であれば脇殿である可能性が指摘できる。左京第533次調査(向日市森本町)では、13世紀後半から14世紀前半に営まれた集落である戌亥遺跡に関連する調査成果が得られている。

右京域 右京第972次調査(長岡京市開田)では、長岡京期の条坊及び宅地内建物跡等に関連する遺構の下層で、墳丘の全長が約30mの小規模な前方後円墳である塚本古墳の周濠の調査が実施された。検出面で幅約3.5mを測り、周濠の内部では、墳丘から転落して集積した状態で各種の埴輪類が出土した。一緒に出土した土師器・須恵器の年代観から、当古墳は5世紀末～6世紀初頭に築造され、長岡京造成時に墳丘が取り壊されて周濠が埋め立てられたことが明らかとなった。宮域の南西側隣接地にあたる右京第976次調査(長岡京市今里)では、長岡京期の宅地の地盤に整地造成を行っていることが確認された。軟弱地盤に畝溝を設けた後、異なる質の土を0.1～0.2mの厚さで敷き、さらに上面に南北溝を等間隔(約3m)に配置していた。溝を掘削し異なる質の土を敷くことで、水はけをよくしたと推測されている。この宅地では、南北棟の掘立柱建物跡と門を示す2本の柱穴、長岡京期の遺物を多量に包含する南北溝などが検出された。右京第985次調査(長岡京市開田)は、六条二坊五町の宅地のほぼ中央に位置し、長岡京期の掘立柱建物跡や井戸、溝などが検出された。正方位に掘られた溝には板材による護岸施設が施され、溝の内部から、斎串や下駄・糸巻・箸・曲物・人形・櫛などの木製品や軒瓦、墨書土器、和同開珎・神功開寶などが出土した。とくに文字史料は豊富で、「麻呂?」「一」「廿・二」「涼?」「北」などが解読された。

右京第987次調査(長岡京市勝竜寺)では、乙訓地域最大規模の前方後円墳である恵解山古墳の調査が実施されている。墳丘東側の造り出し部の列石と石敷き面を確認し、その規模や現状を知る手掛かりが得られた。

(伊賀高弘)

普及啓発事業（11月～2月）

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業により影響を受ける埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施しています。また、その成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第115回埋蔵文化財セミナーを2月20日（土）に開催しました。恭仁宮・長岡宮の宮内構造を知る新たな発見と、大山崎瓦窯跡・鹿背山瓦窯跡の最新調査成果について、現地を担当した調査員から報告がありました。新聞や当センターのホームページを見て、大阪府や兵庫県、滋賀県からも聴講に来られ、116名の参加者を得て盛況裏に終えることができました。

現地説明会

長岡京市伊賀寺遺跡は、石囲い炉をもつ住居跡や火葬骨を埋葬した墓壙などを検出し、縄文時代中～後期における中心的な集落として注目を集めています。長岡京跡右京第988次・伊賀寺遺跡の調査では、縄文時代中期の住居跡を新たに5基確認し、中～後期にかけて総数21基の竪穴式住居跡を検出したこととなります。現地説明会を12月19日に開催し、101名の方々の参加を得ました。

長岡京跡右京第970次・下海印寺遺跡の調査では、古墳時代後期の竪坑式住居跡や奈良・平安時代、中世の遺構群を確認しました。11世紀末～12世紀初頭に築かれた大規模な堀や建物跡は、在地領主層の屋敷跡と考えられます。1月30日に現地説明会を開催し、173名の方々に参加していただきました。

女谷・荒坂横穴群は、総数50基を超える古墳時代後期の大規模な横穴群です。今回、横穴8基を新たに調査しました。平安時代に横穴を再利用したものがあり、1基の横穴には銅鏡（八花鏡）が埋納されていました。1月30日に現地説明会を行い、168名の方々の参加を得ました。

下馬遺跡は、里廃寺や下狛廃寺に近い丘陵裾部に位置し、南山城を広く見渡せる適所に営まれています。平安時代の総柱の建物跡や柵列、室町時代の瓦や香炉が廃棄された土坑を検出しました。1月31日は雨の中、熱心な考古学ファン101名の参加を得ました。

「遺跡に学ぶ」考古学講座

センターでは9月から11月の3か月間に計4回の考古学講座を開催することとし、11月に第3回、第4回の講座をセンター研修室で開催しました。7日の土曜日に開催した第3回の講座では、「古代寺院からみた『神雄寺』」と題して松尾史子調査員から、28日の第4講座は、「岩を削って、城と成す」と題して伊野近富次席総括調査員から、遺物の展示やスライドを交えて、詳しく説明しました。各講座の参加者は熱心に耳を傾けていました。（水谷壽克）

センターの動向

(平成21年11月～平成22年2月)

月	日	事	項
11	2	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋文研修会(於：京都市) 森島康雄主任調査員講師派遣、肥後弘幸調査第1・2課課長、水谷壽克調査第1課主幹、小池寛調査第2課課長補佐、辻本和美次席総括調査員出席	
	5	金沢城調査研究委員会(於：石川県) 森島康雄主任調査員派遣 亀岡市人権教育指導者研修会(於：亀岡市) 肥後弘幸調査第1・2課課長受講	
	6	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(向日市) 杉江昌乃総務係長、今村正寿総務課主任、鍋田幸世総務課主事出席	
	7	「遺跡に学ぶ」考古学講座Ⅲ「古代寺院からみた『神雄寺』」講師：松尾史子調査員(参加者25名)	
	10	人権大学講座(於：京都市) 安田正人事務局副局長、小池寛調査第2課課長補佐受講	
	12	小池久常務理事・事務局長南部遺跡現地視察	
	13	恭仁宮調査委員会 肥後弘幸調査第1・2課課長出席	
	16	職員研修「公益法人制度改革について」講師：杉江昌乃総務係長 職員健康診断	
	17	中山城跡(舞鶴市)発掘調査開始	
	24	向日が丘養護学校生徒整理作業見学(参加者8名)	
	25	井上満郎理事、京都新聞大賞受賞 長岡京連絡協議会(於：当センター) 長岡京跡右京第968次(長岡京跡)発掘調査終了(4/22～)	
	26	出土品整理(雇用対策事業)開始 椋ノ木遺跡(精華町)発掘調査開始	
	28	「遺跡に学ぶ」考古学講座Ⅳ「岩を削って、城と成す」講師：伊野近富次席総括調査員(参加者23名)	
	30	平安京跡右京四条一坊(京都市)発掘調査開始	
12	1	京都人権啓発行政連絡協議会人権研修会(於：京都市) 杉江昌乃総務係長出席 萬福寺松隠堂(宇治市)発掘調査開始	
	2	都出比呂志 理事第二外環状道路関係遺跡現地指導	
	3	長岡京跡右京第986次・上里遺跡(長岡京跡)発掘調査終了(10/20～)	
	11	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：大阪市) 岩松保資料係長出席 新田遺跡(八幡市)発掘調査終了(10/13～)	
	13	八幡市郷土史会歴史講演会 松尾史子調査員講師派遣	
	15	京丹後市史編さん委員会(於：大阪大学) 肥後弘幸調査第1・2課課長出席 八木町史編さん専門部会(於：南丹市) 中川和哉主任調査員出席 亀岡市馬路町史編さん委員会(於：亀岡市) 高野陽子調査員出席	
	16	増田富士雄理事 上狛北遺跡、椋ノ木遺跡、女谷・荒坂横穴群現地指導 長岡京連絡協議会(於：当センター)	
	17	第87回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川) 上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、小池久常務理事・事務局長、石野博信・井上満郎・都出比呂志・増田富士雄・高熊秀臣・川村智各理事出席 人権教育行政担当者等研究協議会(於：乙訓教育局) 田中彰主任調査員、石尾政信専門調査	

員参加

- 19 長岡京跡右京第988次・伊賀寺遺跡現地説明会(参加者101名)
- 21 教育庁職員行政・人権問題研修(於:京都市) 岩松保資料係長、田代弘次席総括調査員、竹原一彦・戸原和人・増田孝彦主任調査員、伊賀高弘主査調査員、筒井崇史調査員、杉江昌乃総務係長、今村正寿総務課主任受講
- 22 教育庁職員行政・人権問題研修(於:京都市) 森島康雄主任調査員、石尾政信専門調査員、柴曉彦主査調査員、高野陽子・奈良康正調査員、鍋田幸世・須田千春主事受講
中山城跡(舞鶴市)発掘調査終了(11/17~)
平安京跡右京四条一坊(京都市)発掘調査終了(11/30~)
- 25 萬福寺松隠堂(宇治市)発掘調査終了(12/1~)
- 1 20 成相寺旧境内・難波野遺跡発掘調査委員会(於:宮津市) 石井清司調査第2課主幹出席
- 25 上人ヶ平遺跡公園開園記念式典(於:木津川市) 小池久常務理事・事務局長出席
- 26 歴史探索同好会(代表永田信一他23名) 平安京跡出土遺物資料見学
- 27 長岡京連絡協議会
京都府人権問題特別研修1(於:研修センター) 伊野近富次席総括調査員受講
- 29 石野博信理事 女谷・荒坂横穴群、第二外環状道路関係遺跡現地指導
乙訓地域の首長墓の歴史的位置付けに関する検討会(於:乙訓教育局) 水谷壽克調査第1課主幹出席
- 30 長岡京跡右京第970次・下海印寺遺跡現地説明会(参加者173名)
女谷・荒坂横穴群現地説明会(参加者168名)
- 31 下馬遺跡現地説明会(参加者101名)
- 2 3 安全パトロール(南部調査地)
- 5 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於:和歌山) 肥後弘幸調査第1・2課課長、小池寛調査第2課課長補佐出席
- 9 京都府人権問題特別研修2(於:研修センター) 引原茂治主任調査員、岡崎研一専門調査員受講
- 10 京都府人権問題特別研修3(於:キャンパスプラザ) 中川和哉主任調査員、村田和弘調査員受講
- 13 椋ノ木遺跡地元説明会(参加者15名)
椿井遺跡地元説明会(参加者15名)
- 18 椿井遺跡(木津川市)発掘調査終了(10/28~)
- 19 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於:大阪府) 小池久常務理事・事務局長、安田正人副局長参加
2府1県会議(於:滋賀県) 肥後弘幸調査第1・2課課長、小池寛調査第2課課長補佐、岩松保資料係長出席
蔵垣内遺跡(亀岡市)発掘調査終了(4/22~)
下馬遺跡ほか(精華町)発掘調査終了(7/21~)
- 20 第115回埋蔵文化財セミナー(参加者116名)
- 24 長岡京連絡協議会
- 25 井脇城跡(京丹波町)発掘調査終了(10/22~)
女谷・荒坂横穴群(八幡市)発掘調査終了(7/9~)
上狛北遺跡(木津川市)発掘調査終了(10/27~)
- 26 第二外環状道路関係遺跡(長岡京市)発掘調査終了(4/8~)

編集後記

情報 111 号をお届けします。

本号では、資料紹介として、長岡京市調子で出土した銅鐸形土製品の紹介をしています。小さな遺物ですが、その成立の背景や使用方法など、興味が尽きないことがわかるかと思えます。遺跡でたどる京都の歴史では、近世社会を扱っています。文献資料が多い中で、考古学でもおもしろい成果を得ていることがわかるかと思えます。また、発掘調査略報では、今年度の調査成果を速報しています。

(編集担当 岩松)

京都府埋蔵文化財情報 第111号

平成 22 年 3 月 31 日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 河北印刷株式会社

〒 601-8461 京都市南区唐橋門脇町 28

Tel (075)691-5121(代) Fax (075)671-8236



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER